基本枚数
46枚
魔法使い
の
迷宮
Adult Only
R-18

「…うーん…、ええ…、どうしよう…」
フェスティバルの出し物でBMGは、ひたすら悩んでいた。
「…まだ決まらないの？」
湯の温度を調節していたファイヤーソーサラーが尋ねる。もちろん、思考が迷走しているBMGからの返事はなかった。
何時間も付き合わされていたファイヤーソーサラーが呟く。
「思考の迷宮入り…」

「…迷宮ッ!?それだぁッ！」
稲妻が走り抜けたような閃きにBMGは
大声を立ち上がる。

「ありがとう！おかげでフェスの
催し物が決まったよ！」

問題が解決したBMGは意気揚々と
脱衣場の方へ消えていく。

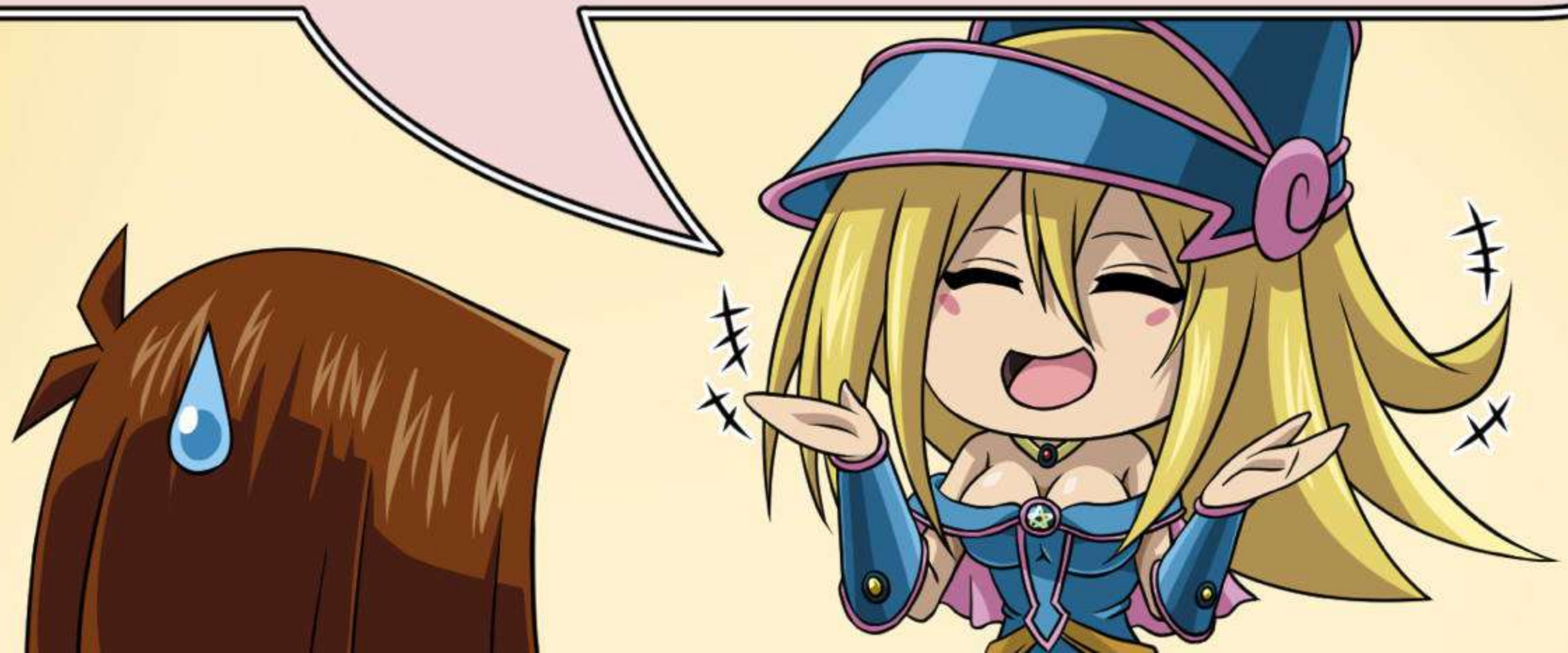
解放されたファイヤーソーサラーは、
肩まで湯に浸り、夜空を見上げる。
「…やっと帰れる」

「…えッ、ちょ…！なっ、なに!?」
杏子は突然身体が浮いたような浮遊感に戸惑っていたが、それが足元に空いた穴からの落下によるものだと気づくには、そう時間が掛からなかった。
「…うそっ!?いや…、いやぁぁぁあッ！」
悲鳴を上げながら何処かへ向かって落下し続ける杏子の身体は、いつしか光に包まれていた。

「…うう、…ここは…どこ？」
目を覚ました杏子は、朦朧とする頭で
辺りを見渡す。
天井のない遺跡らしき場所に杏子はいた。
「…暑い。随分とムシムシしてる所ね…」
床や壁の石にビッシリと生えた苔が
湿度の高さを物語っていた。

「ようこそ！杏子ちゃん！」
不意に明るい声が杏子に投げかけられる。
「えっ！…ブッ、ＢＭＧ!?」
驚きのあまり杏子は声が上擦る。
ＢＭＧは何も気にしないかのように
そのまま話を切り出す。杏子は状況が
整理できず、只々圧倒されていた。

今ね、フェスティバル中なんだよ♪
コレが私の催し物、『魔法使いの迷宮』ね。
ちなみにフェスティバルというのは、暇を持て余したお祭り好きのモンスター達が主体になって、ときどき行われるイベントね。
今回は杏子ちゃんや他の人たちも巻き込んだ、ちょっと大きめのイベントになったんだよ。
『魔法使いの迷宮』というのは、迷路を探索をゴールを目指すダンジョンゲームで……



BMGは矢継ぎ早に状況を説明し続ける。

「これがゲームのマップよ」
BMGが杖を振ると、マップらしき物体が現れた。
「スタート地点がここで、ゴールがここ。
あぁ、それとメイズ内はトラップとかモンスターがいるから注意してね」
それだけ告げると、BMGは何処かへと姿を消した。

「…もう、勝手に消えたら困るじゃない…」
仕方なしに杏子は迷路の中を進み始めた。
「…でも、迷路の中を進むのも雰囲気があって面白そうね」
杏子は警戒しながらも内心楽しみながら
足を進めた。

ある程度進んだ時、杏子の足元に
魔法陣が現れた。
「…えっ？」
気付いた時にはトラップが発動していた。

何処からともなく現れた手枷によって、杏子の身体が吊り上げられる。

ガチャッ…

悲鳴を上げようとした時には目隠しをされ、ボールギャグと鼻フックを施されていた。

ふぐぐっ

もいふぃッ

あぐぅ…

足元からは角が金属で固定された三角木馬が真上に迫上がる。

ギギギ…

容赦無く迫上がった三角木馬が
杏子の股が食い込み、そのまま身体を
押し上げる。
押し上げられたことで腕の鎖が少し弛む。

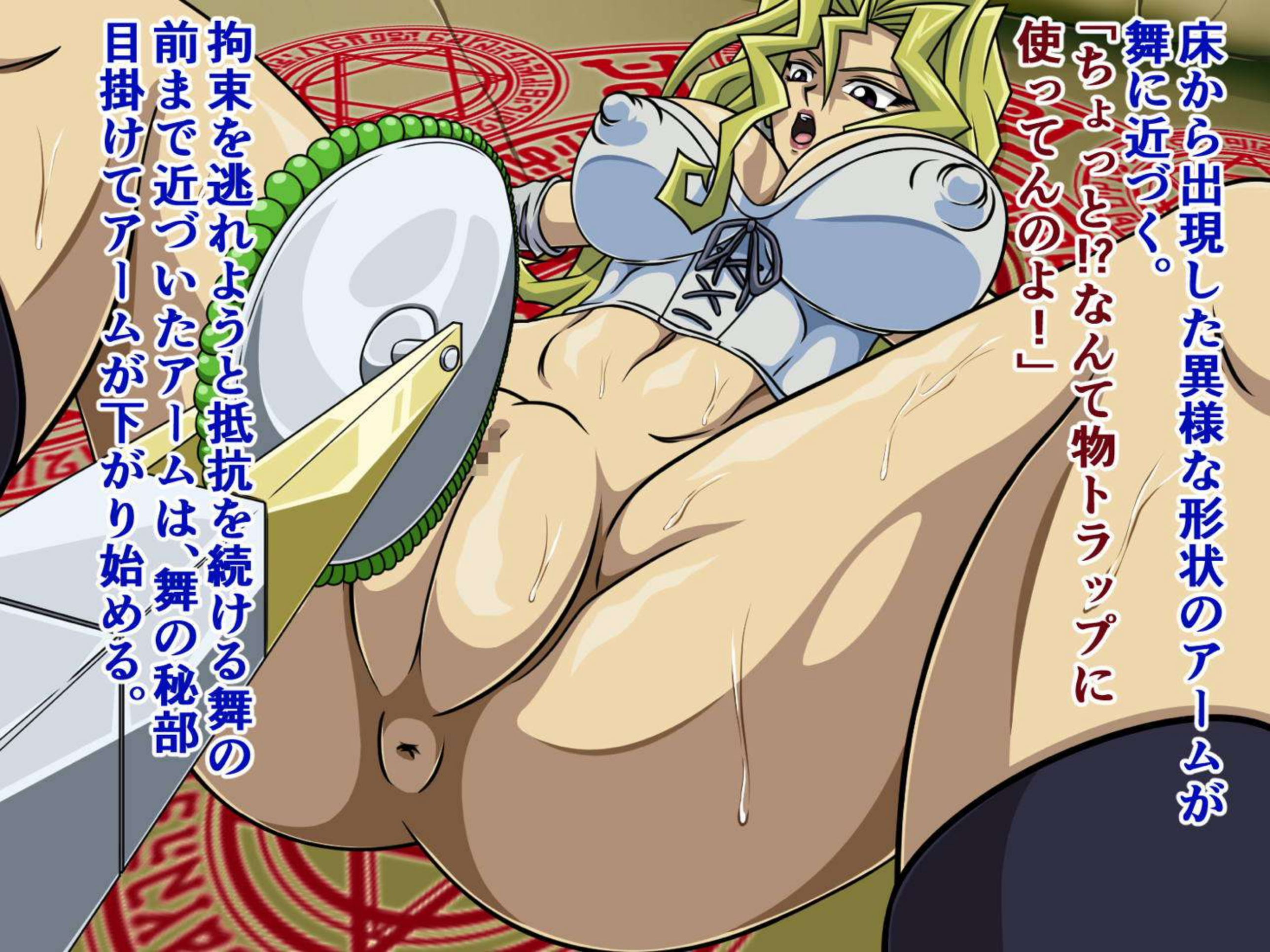
全身を駆け巡る激痛に杏子は声にならない
声を上げ、仰け反る。
弛んだ鎖が杏子の身体を支えるように
ビシッと張る。杏子は足をカクカクと
震わせ、悶絶し続けた。

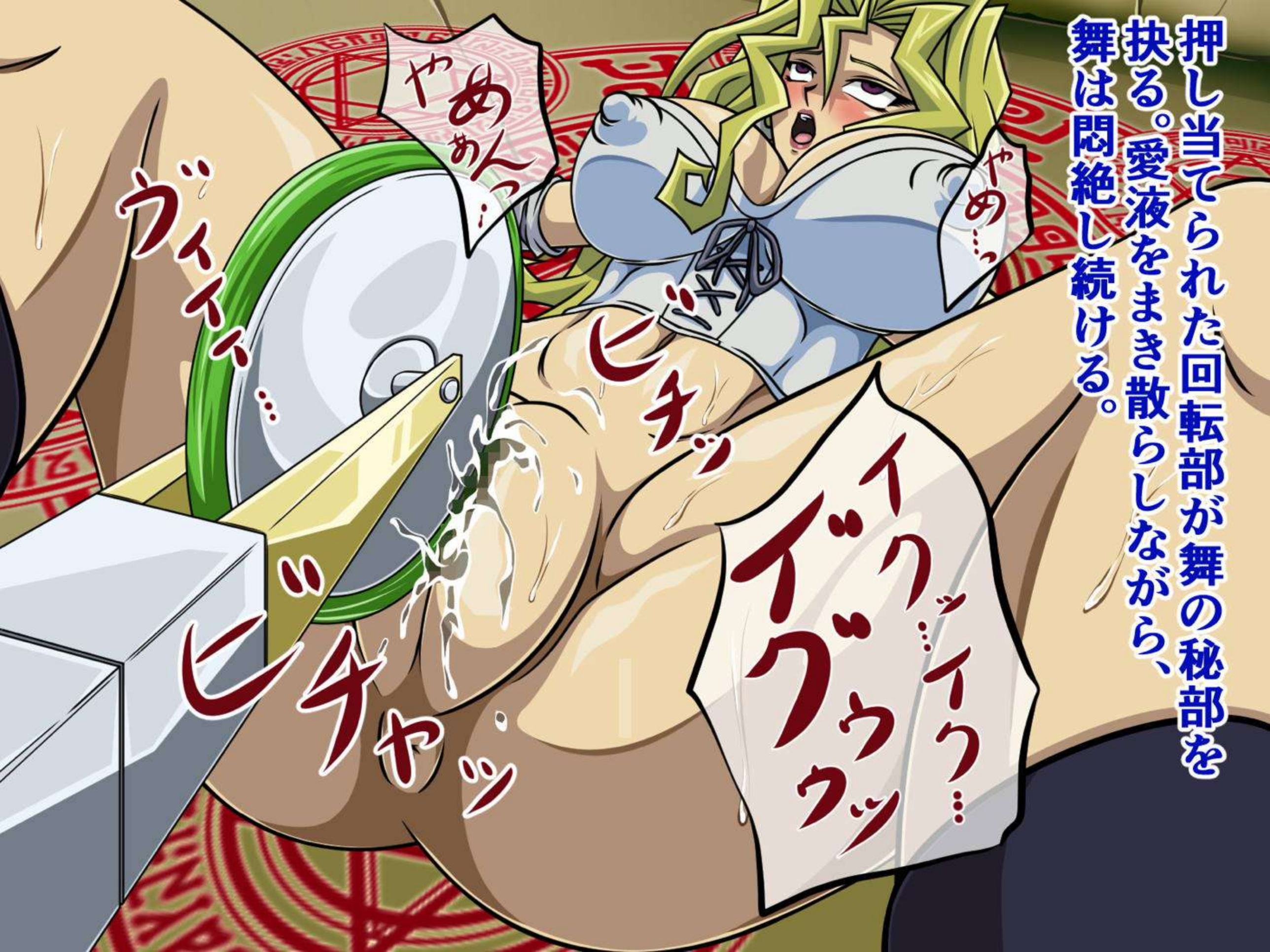
別の通路では、杏子と同じように参加していた静香がモンスターに犯されていた。
あぁ…
や…めてェ
ブチュ…
ブチュ…
おねがい…！
根本まで収まりきらない陰茎が擦れるたび、静香の全身に耐えがたい刺激が走り抜ける。

モンスターの尋常ではない量の中出しとともに、静香は小刻みに痙攣しながら絶頂する。

射精しても衰えることのないモンスターは、朦朧とする意識で余韻に浸る静香を更に犯し続けた。

トラップを踏んだ舞は、股を開いた形で仰向けに拘束されていた。
「なんて格好で拘束すんのよ！」
身体を揺すって脱出を試みるが、抵抗も空しく、拘束が緩む気配すらない。


床から出現した異様な形状のアームが
舞に近づく。
『ちょっと!? なんて物トラップに
使ってんのよ!』
拘束を逃れようと抵抗を続ける舞の
前まで近づいたアームは、舞の秘部
目掛けてアームが下がり始める。


押し当てられた回転部が舞の秘部を抉る。愛液をまき散らしながら、舞は悶絶し続ける。
やめ…っ
やめぁぁんっ
ヴィィィ…
ビチッ
ビチャッ
イグッ…イグッ…ウッ…ウッ…

同時刻、別の通路ではイシズが
スライム系のモンスターに襲われていた。
手足は拘束され、抵抗も出来ず、
されるがままであった。
んむぅ！
ズロォ…
んぐぅ
ヌチャ…
グチュ…
ジュルッ…
クチュ…
もぐぅ…
ギュルッ…
ネチャッ…

偶然行動を共にしていたミホと蝶野もモンスターに襲われていた。

先端部がスパイク状になっている触手が荒々しく膣を擦る。

ギシッ

ギュル…

ヌボッ

ダメ…

やめ…

いや…

あぐぅ

痛…いっ

ギチッ…

グチュッ

「うんうん、皆楽しんでるね！」
BMGは参加者の現在状況を確認していた。
「…さて、杏子ちゃんの方はどうかな？」
BMGは、魔法で杏子の状況を映し出す。

ギチッ…
ジワ…

ギチ…
ふごっ
んぐぅ
ギシッ…

三角木馬が完全に迫上がり、
杏子の身体はのしかかるように
三角木馬に押し上げられていた。
痛みにも段々と慣れ、いつしか杏子は
甘い声を漏らしながら腰を動かしていた。

三角木馬が食い込む割れ目からは、
漏れ出た愛液で染みが出来ていた。

「…ハァ…ハァ、…もう…ダメェ…」
トラップから解放された杏子は、
力尽きたように苔だらけの石畳に
グッタリと倒れこむ。

「…あんなの…、反則よ…」
文句とは裏腹に、杏子は余韻に浸り続けた。

「あっ、いたいた！」
ＢＭＧは、石畳で上でだらしなく足を広げたまま眠っている杏子を見つけた。
「もう！まだ最初のトラップなんだからこんな所で寝てちゃダメじゃない！」
ＢＭＧは寝ている杏子の前まで近づく。

「…こんな場所で寝ちゃう悪い子にはお仕置しちゃうんだから！」
BMGは杏子の恥部を踏むつける。抵抗どころか、杏子は足をさらに広げる。
ん…
あぁっ
あんっ
じわぁ…
グッグッ…
グニュ…
「こんなのが気持ちいいなんて、…杏子ちゃんは変態さんだね！」
緩急をつけて、絶妙な力加減で踏み続ける。
甘い声で喘ぐ杏子のショートパンツの染みが更に広がる。

「おマ○コ踏まれて感じちゃう変態の悪い子さんには、こうだッ！」
BMGは、一際強く力を込めて踏みつける。
イイッ
あはんっ
もっとぉ！
じわっ…
グニャッ…
グッ…
嬌声を上げながら仰け反る杏子の股は、まるで漏らしたように染みが大きく広がる。

「…んっ、…はぁ…ん…」
絶頂し、愛液でショートパンツを濡らし尽くした杏子が目を覚ます。

うぅんっ

グリッ…グリッ…
グッグッ…

あ…んっ

「おはよう、杏子ちゃん！」
恥部から足を退かし、BMGが優しく声をかける。

やっ…んっ

『…えっ、ちょっ、ちょっと!?』
杏子の身体が宙に浮かぶ。
着用していた衣服も脱がされ、身動き一つ
取れずにいた。
『…言ったよね？メイズ内には、
モンスターがいるから注意してって』
杏子が眼下を見下ろすと、裸になった
BMGがいた。
その局部には、男性器が生えていた。

BMGは宙に浮かぶ杏子の足を掴むと、
身体を引き寄せる。

ガシッ

あぁッ

抵抗できない杏子の膣にBMGは、魔法で
作った陰茎を挿入する。

グジュッ…

まぁっ…んっ

んっはぁ…

「…きっつぅ…！身体引き締まってるだけあって、すごい締め付けぇ…！」

あぢッッ

キュン…

ピッッ

ハギュッ

BMGの陰茎が膣壁を押し退けながら突き始める。

ズッ…ズュ…

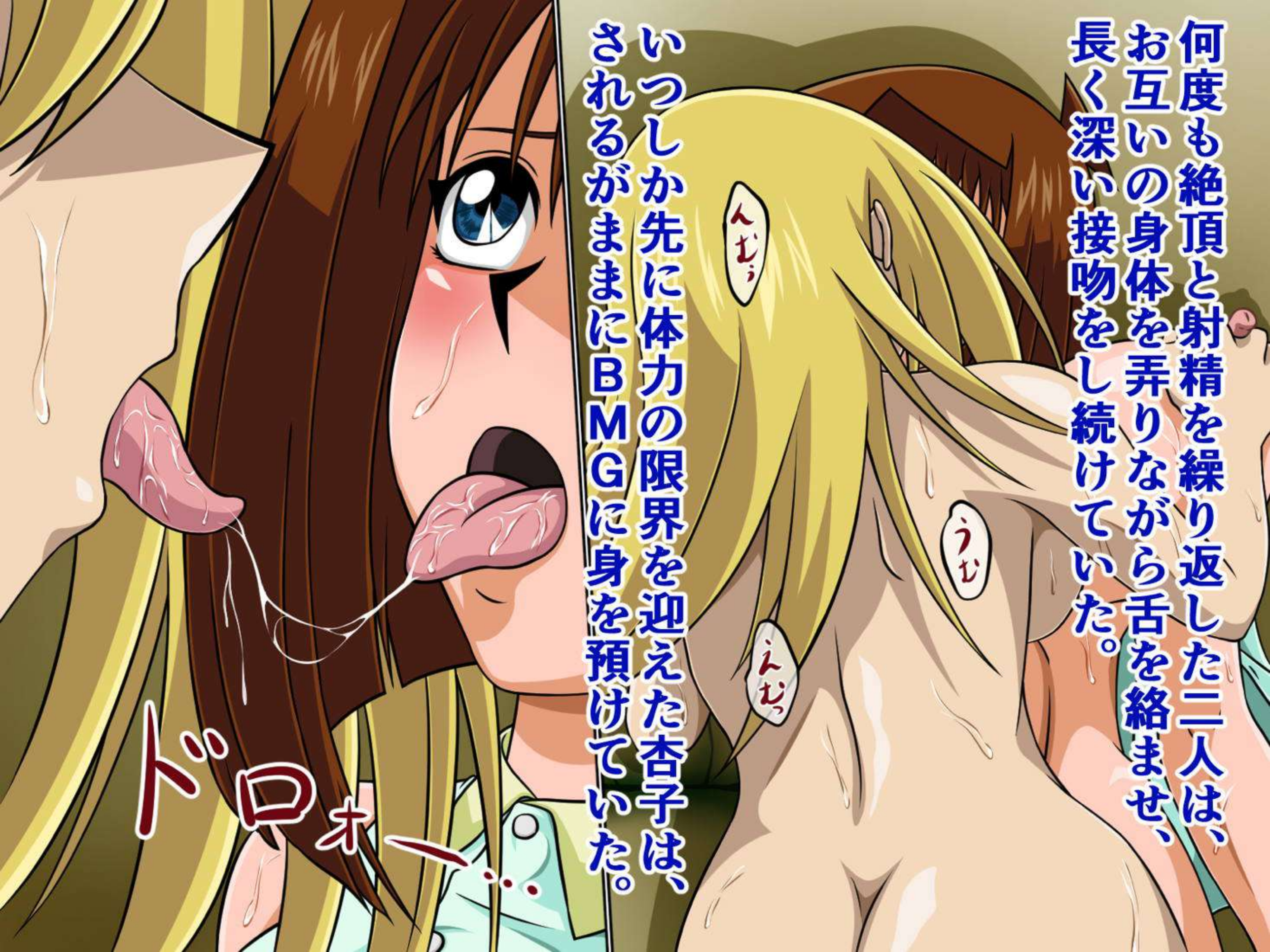
いたぁ…

硬い石畳の上で柔肌が重なり合う。
「…痛い？でも大丈夫！すぐに気持ちよくなるよ！」
愛液で濡れた膣を陰茎が擦る度、
クチュクチュと生々しい音が鳴る。
クチュッ…
ヌチュッ…
クチュ…
ムニュ…
やんっ…
あっ

BMGが突くたびに二人の乳房が激しく揺れる。
汗が飛び散り、荒い息遣いで二人の身体は重なり続けた。
何度も絶頂を迎え、BMGも何度も子宮に収まりきらない量の精液を射精し続けた。
パンッ…
イクッ
パン…
パンッ…
ブルンッ
グニュ…
ビュルッ
イっちゃう
またぁ

何度も絶頂と射精を繰り返した二人は、
お互いの身体を弄りながら舌を絡ませ、
長く深い接吻をし続けていた。

いつしか先に体力の限界を迎えた杏子は、
されるがままにBMGに身を預けていた。



気が済むまで性行為をしたBMGの
局部には男性器はなくなっていた。
「気持ちよかったよ杏子ちゃん。…でも、
ずっと寝てたらダメだよ。リタイヤ扱いに
なっちゃうからね！」
BMGは満足そうに立ち上がった。

「それじゃあ、頑張ってね！」
BMGは、汗だくで地面に寝転がっていた
杏子を放置して、その場を去っていった。

秘部から精液を垂れ流しながら、
杏子は、しばらく動くことが出来なかった。

参加者のほとんどが何かしらのトラップやモンスターの餌食となっていた。レベッカもその一人であった。

あはぁ…

はぅ…ん

コポ…

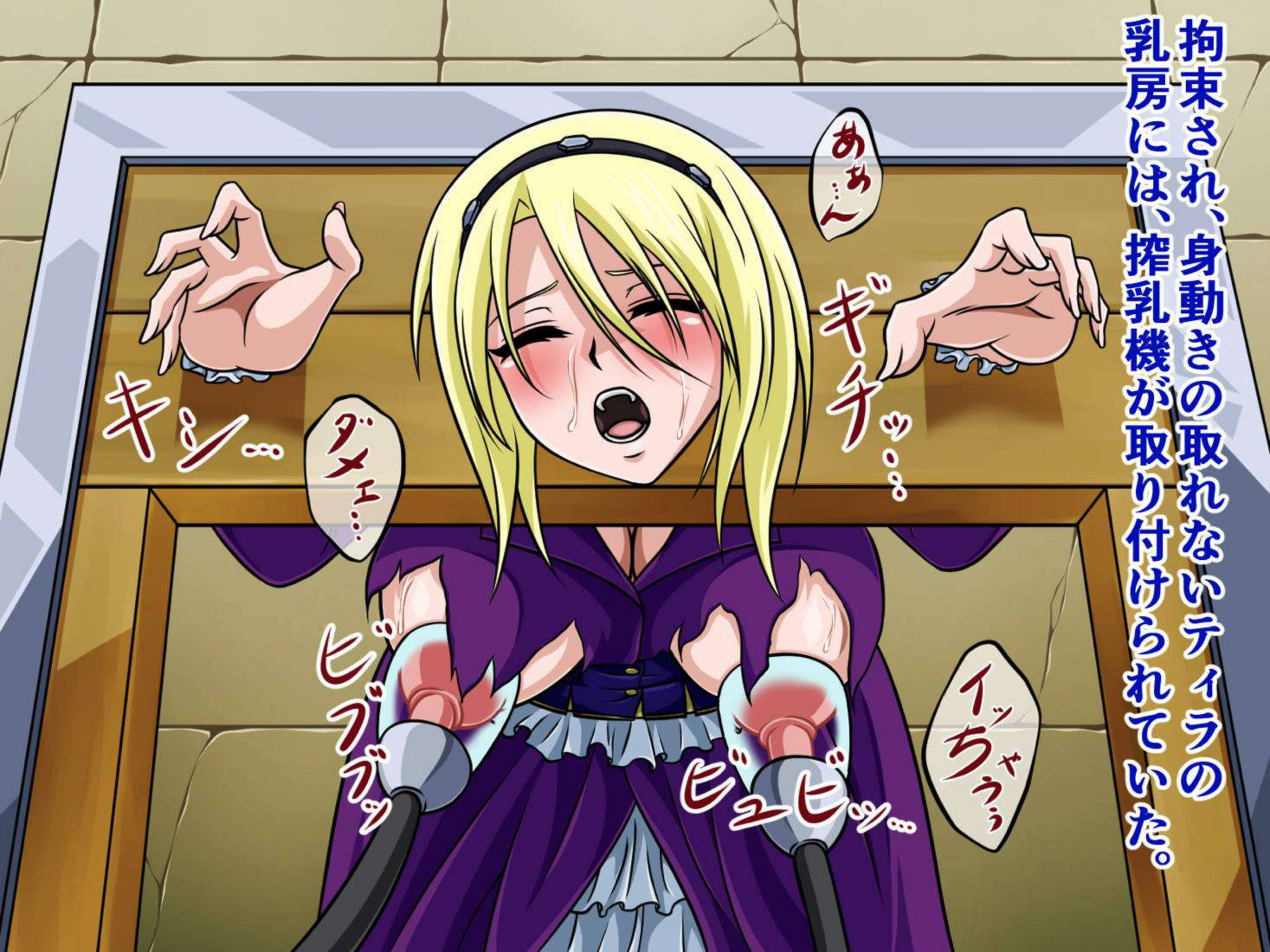
コプ…

腹部が膨張するほどの液体を注入されたレベッカは、恍惚した表情で、壁に寄り掛かっていた。

スライムに犯されたヴィヴィアンは、
グッタリと石畳に身を預け、荒い息遣いで
放心していた。
モンスターもぬちゃぬちゃと不快な音を
たてながら、ゆっくりとヴィヴィアンから
離れていった。
はぁ…
はぁ…ん
はっ…
ズロ…
ニュル…
ヌル…

うなだれるように気を失っている玲子の秘部からは、精液がとめどなく溢れ出ていた。
ギシ…
はぁ…ぁ
トロッ
コポ
コポォ
…う、
チャラ…
トラップの拘束が解けていないため、モンスターと遭遇した場合、逃れる術がなかった。

拘束され、身動きの取れないティラの乳房には、搾乳機が取り付けられていた。



「…はぁ、酷い目に遭ったわ…」
足腰が立たないのか、よろめきながら
壁に寄り添って迷路を進んでいた。
「…でも、結構気持ちよかったわね」
腹部を擦りながら杏子は呟いた。
ニュルッ…
シュル…
ヨロッ…

杏子が迷路を真っ直ぐ進もうとした時、
脇道から這い出てきた触手に杏子に襲い
掛かる。
「…まっ、待って！…離しなさいよッ！」
触手は杏子に巻き付くと、そのまま脇道に
引きずり込む。
ギュルッ
シュルルッ

「…んはぁ…んッ！離してッ！」
杏子に巻き付いた触手は、通路の奥へ
向かって引きずり込む。
「お願いっ…、ソコは今敏感なのッ！
グチュグチュしないでぇ…ッ!!」
触手に掻き回される膣からは、精液と
愛液が撒き散り、通路を汚していく。

『…はぁ、やっとゴールに着いたわね…』
迷路のゴールに到達した舞が溜息混じりに呟く。
『…ほら、無事にゴールしたわよ』
舞は、肩を貸してもらわなければ歩けないほど疲れ果てていた静香に語りかける。

杏子はトラップ地点まで触手に連れ込まれ、禍々しい形状のモンスターに拘束されていた。

これから何が行われるか、容易に想像できたが、身動きの取れない杏子には、どうすることも出来なかった。

秘部を擦っていた触手は、勢いよく挿入する。子宮口を殴りつける様な一切の容赦もない激しい責めに、杏子は悲鳴にも似た嬌声を上げた。

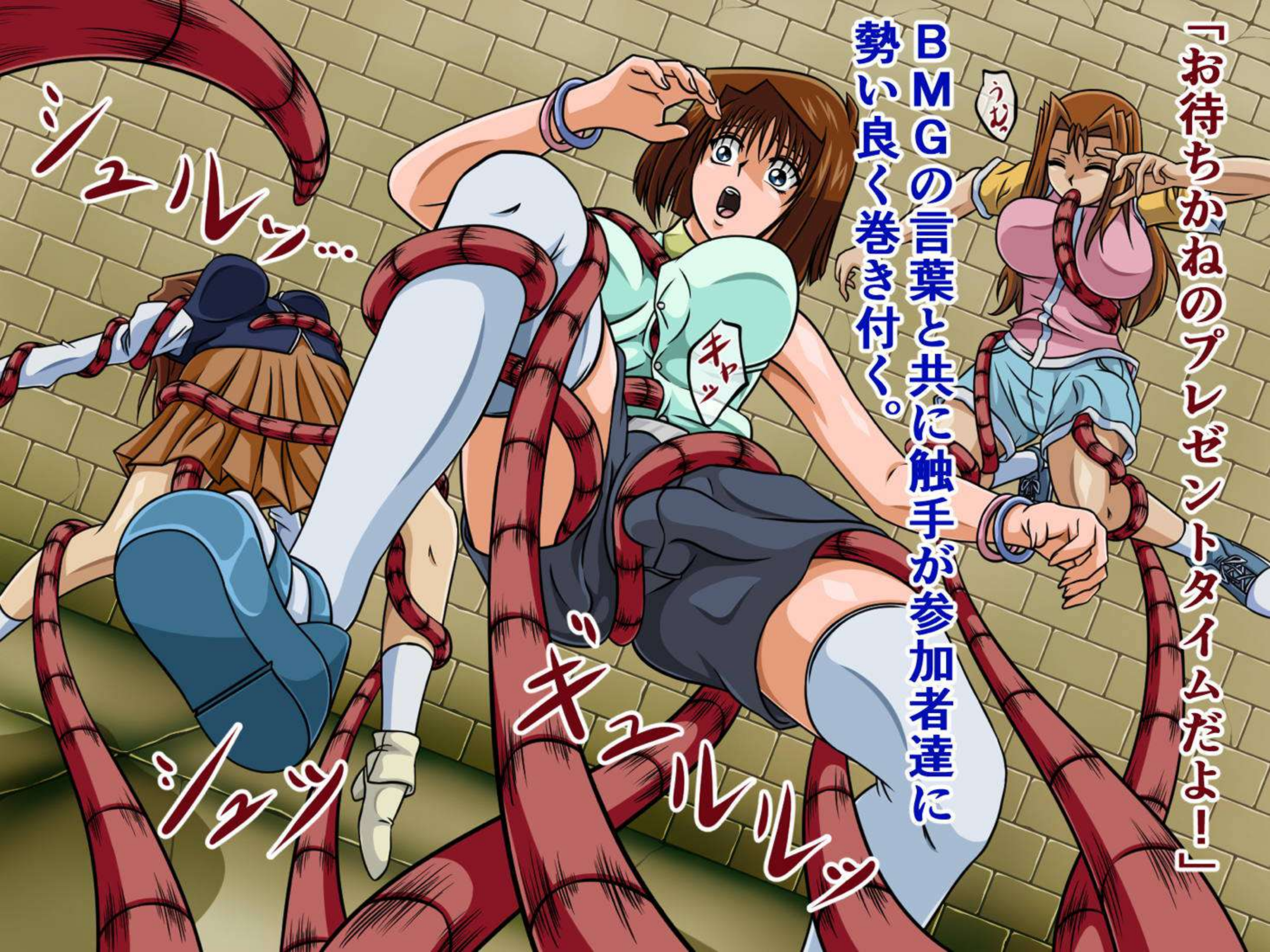
激しく責め続ける触手に意識が傾き過ぎた時だった。
突然、杏子の身体に電流が走り抜ける。
モンスターは拘束だけでなく、高圧電流を用いて杏子を責め始めた。
ビリ…
あぎゃあああ
いだぁいっ
バリッ…
ビチ…
ズボッ
ガシュッ
やめぇ!ッぇッ
バチッ

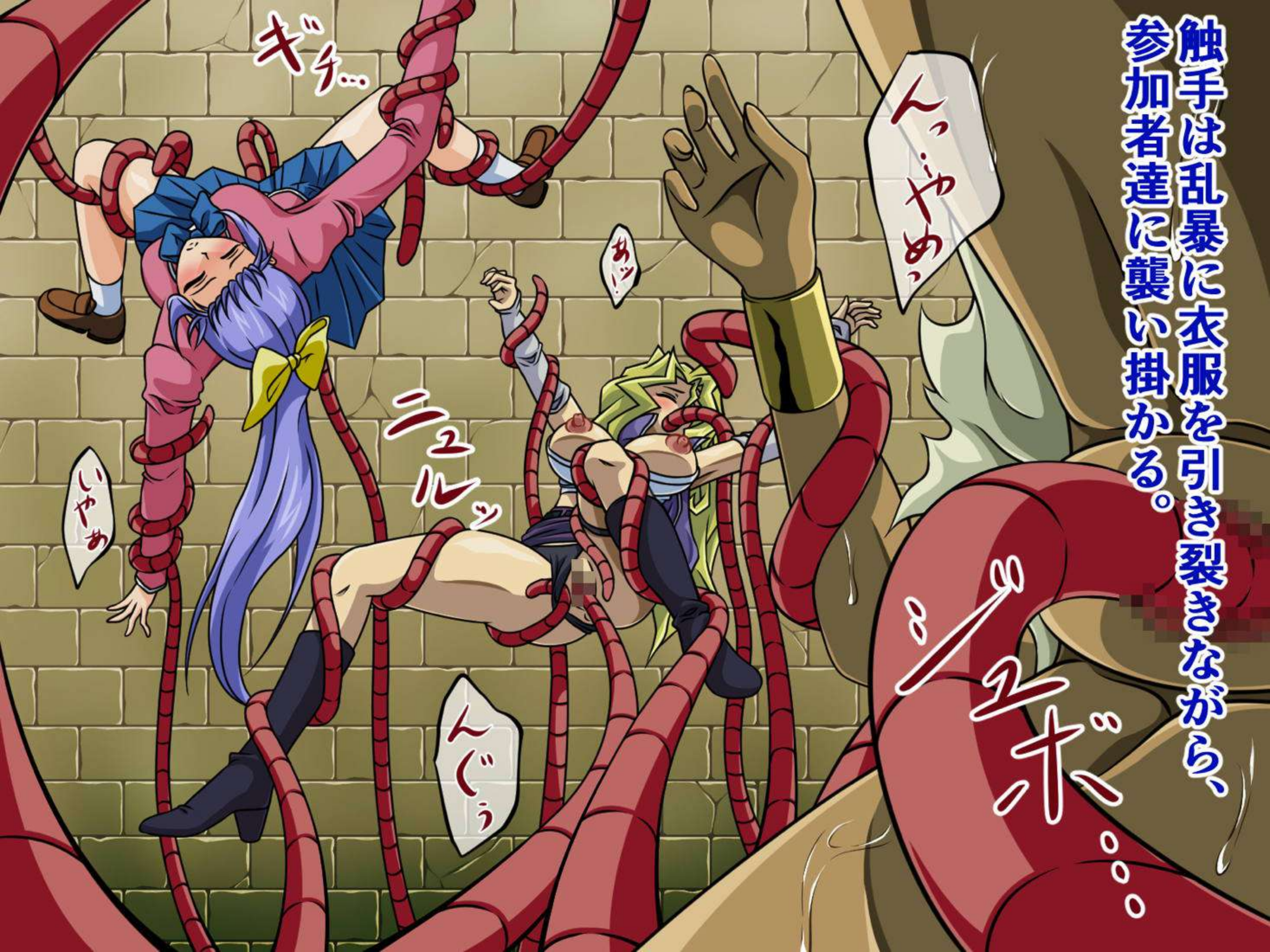
電流で全身の筋肉が緊張した杏子は、
膣の締め付けが一層強くなったことで、
触手の責めが激しさを増す。

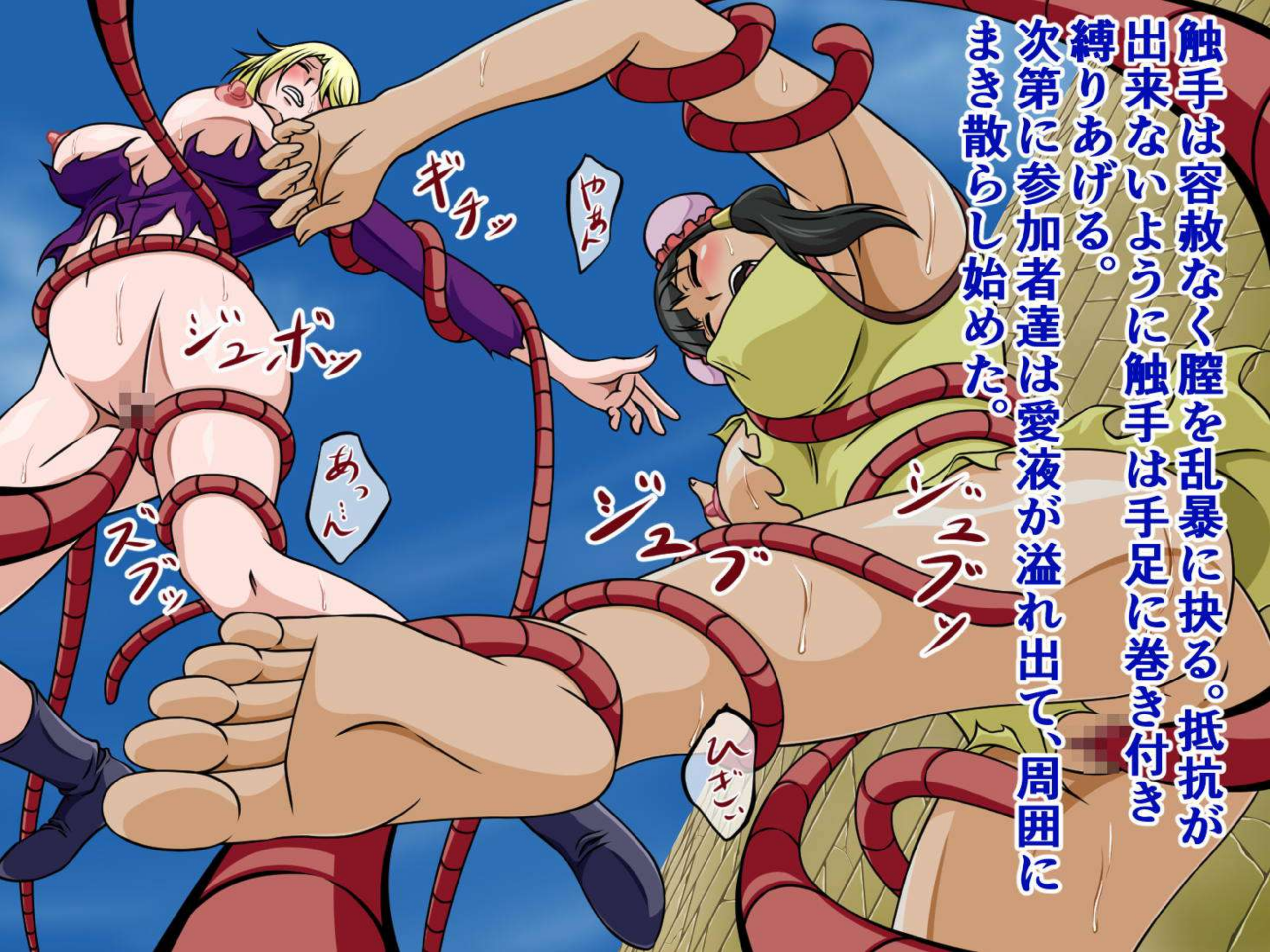
痛みと快楽の入り混じった責め苦に、
杏子は獣のように嬌声を上げ続けた。

「無事ゴール出来たみんな！お疲れ様！」
気が抜けるほど明るい声でBMGが
労いの言葉を投げかける。
「ゴール出来たみんなには、とっておきの
お楽しみプレゼントがあるからね！」
ワッ

衣服を直してもらったゴール到達組の
面々は、様々な話題で談笑をしていた。


『お待ちかねのプレゼントタイムだよ！』
うん。
BMGの言葉と共に触手が参加者達に
勢い良く巻き付く。
キャッ
シュルッ…
ギュルルッ
シュッ


触手は乱暴に衣服を引き裂きながら、
参加者達に襲い掛かる。
ギチ…
ん…やめ
あッ!
ニュルッ
いやぁ
んぐぅ
ジュボ…



触手は容赦なく膣を乱暴に抉る。抵抗が出来ないように触手は手足に巻き付き縛りあげる。次第に参加者達は愛液が溢れ出て、周囲にまき散らし始めた。

「触手を楽しむのも良いけど、愛撫代わりの前戯だから、今のうちにしっかり濡らしておいてね♪」
BMGが明るい声で語りかける。
あぼっ
ギチン…
ジュブ…
ジュボッ
ブルッ
もっとぉ！
シュルッ
いいッ

「あっ、集まってきたね！」
十分過ぎるほど、愛液が滴り落ちた頃、
迷路内を徘徊していたモンスター達が
一堂に集まっていた。

ダラーッ

ひぃッ

あんッ

ボタッ…

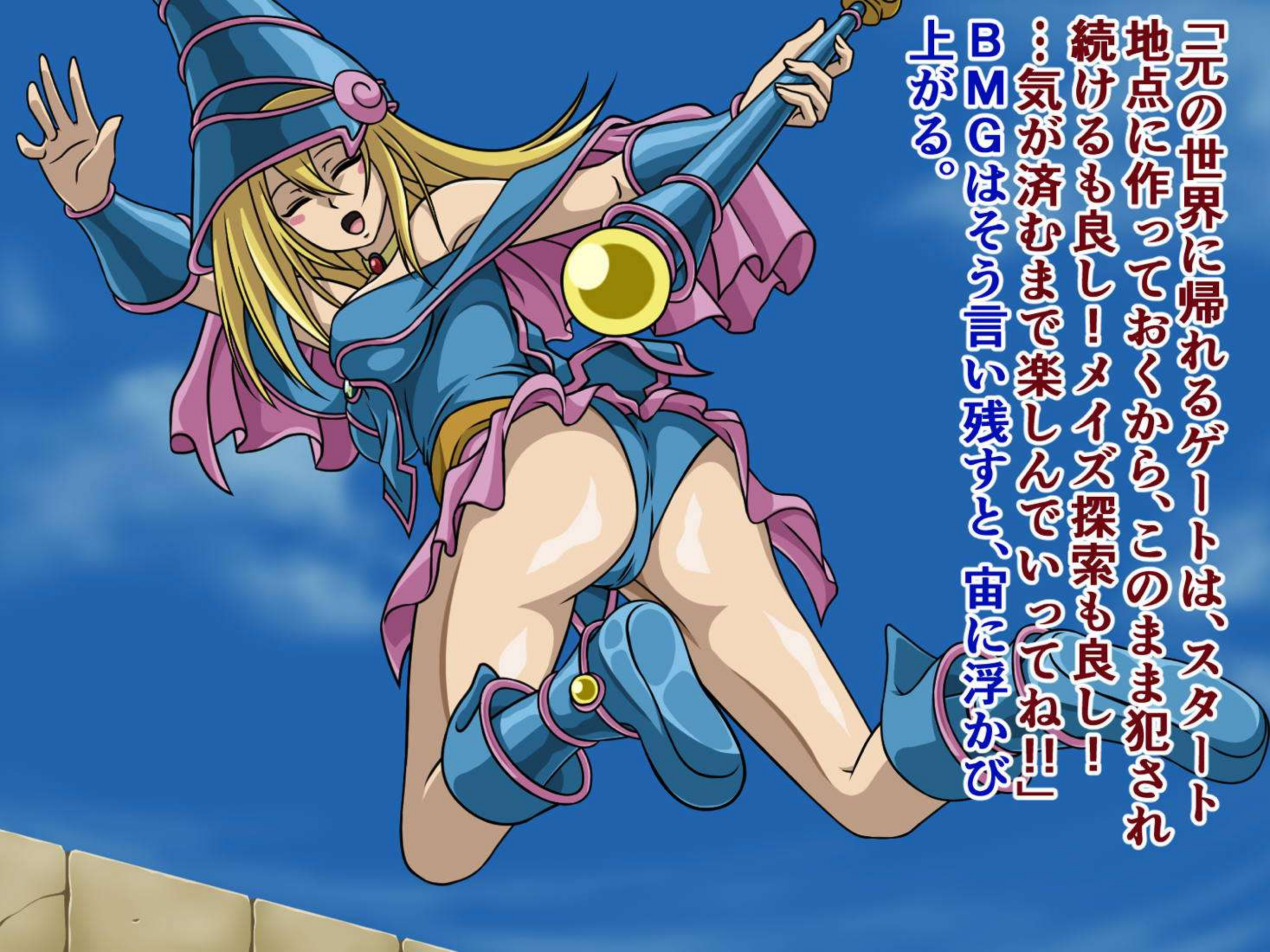
ボタッ…

すっごッ

「ゴール到達者へのプレゼントはね、
このゲームのために集まってもらった
モンスター達と気が済むまで性行為
出来る権利だよッ!!」

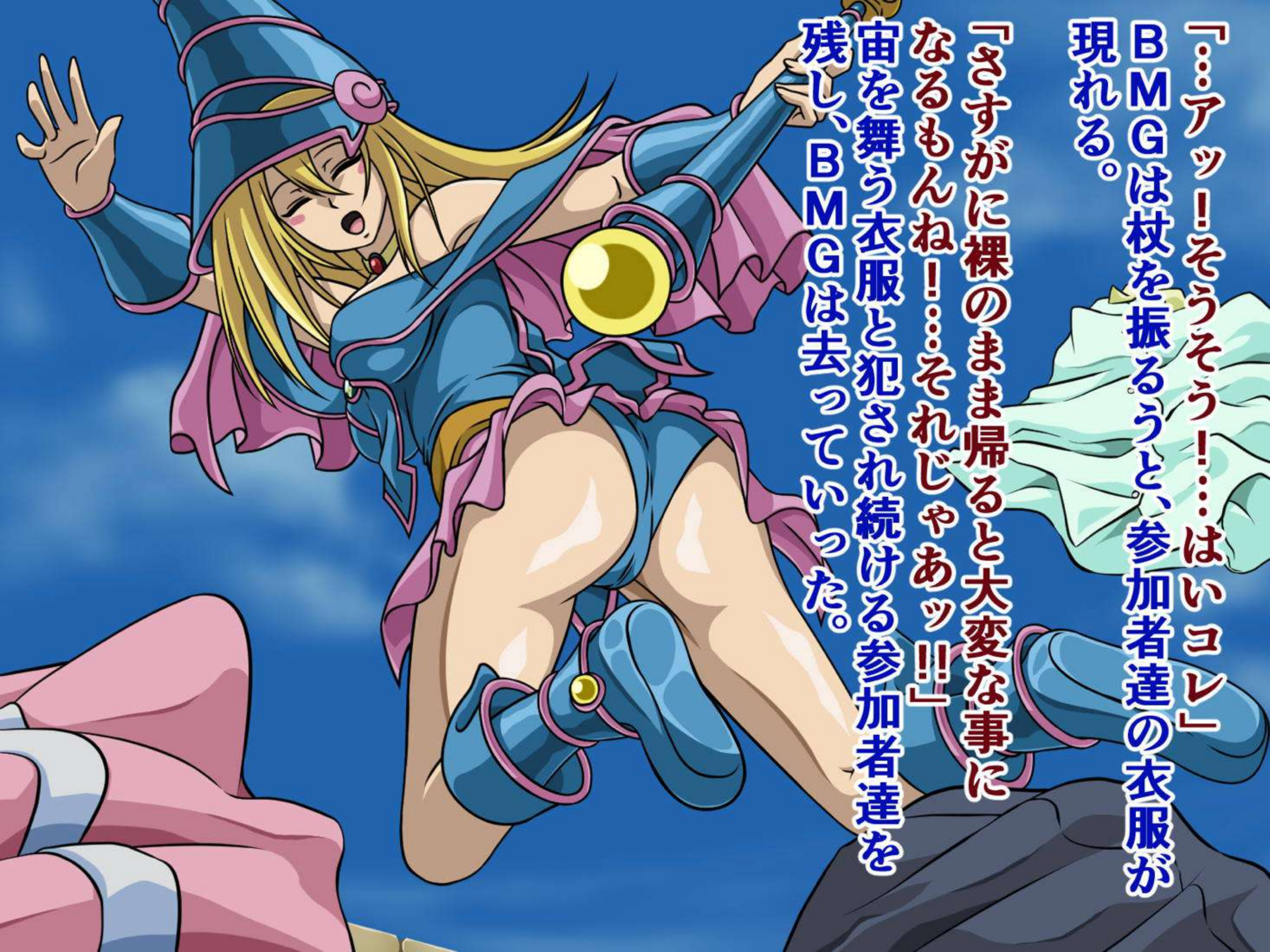
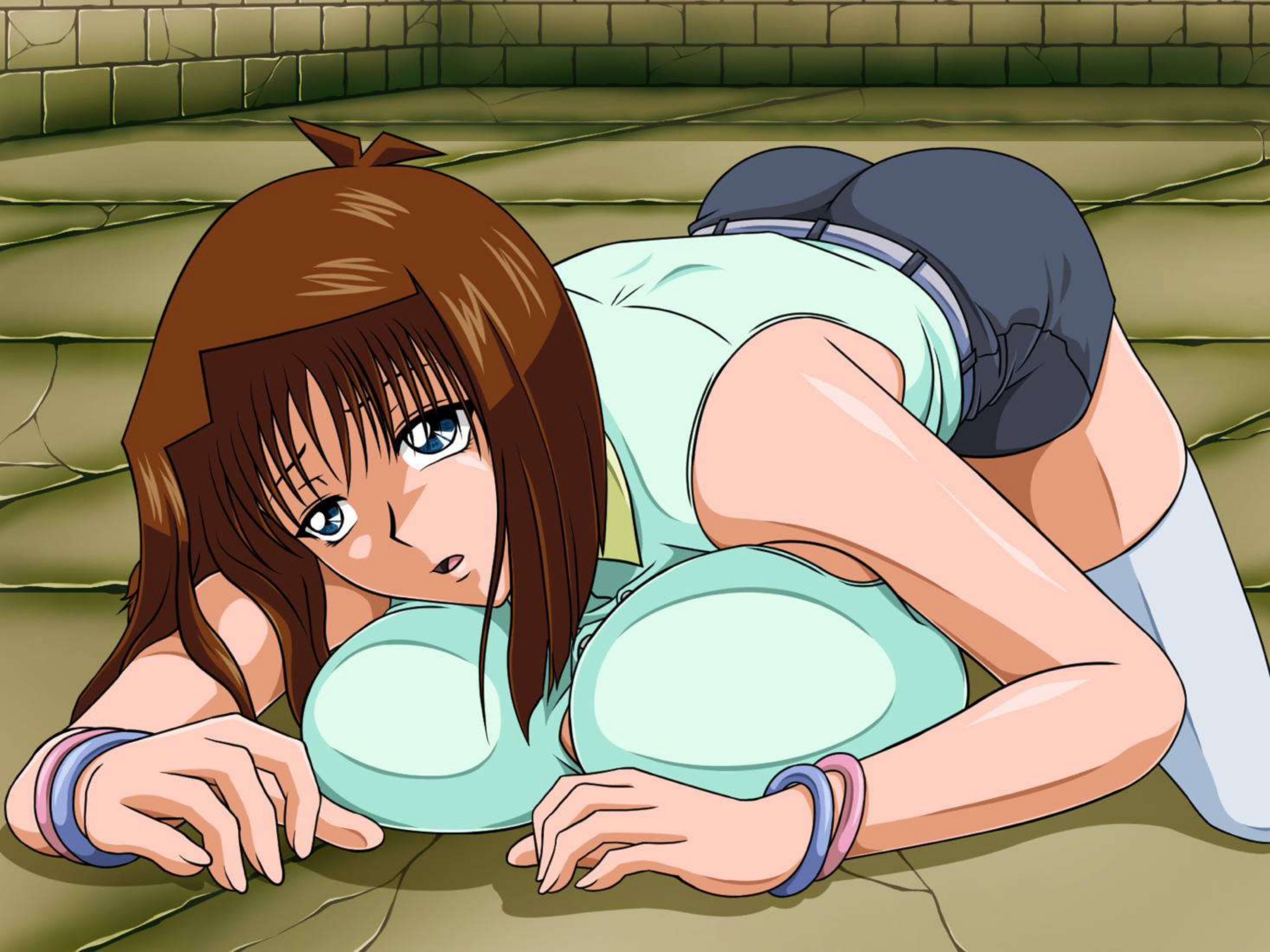
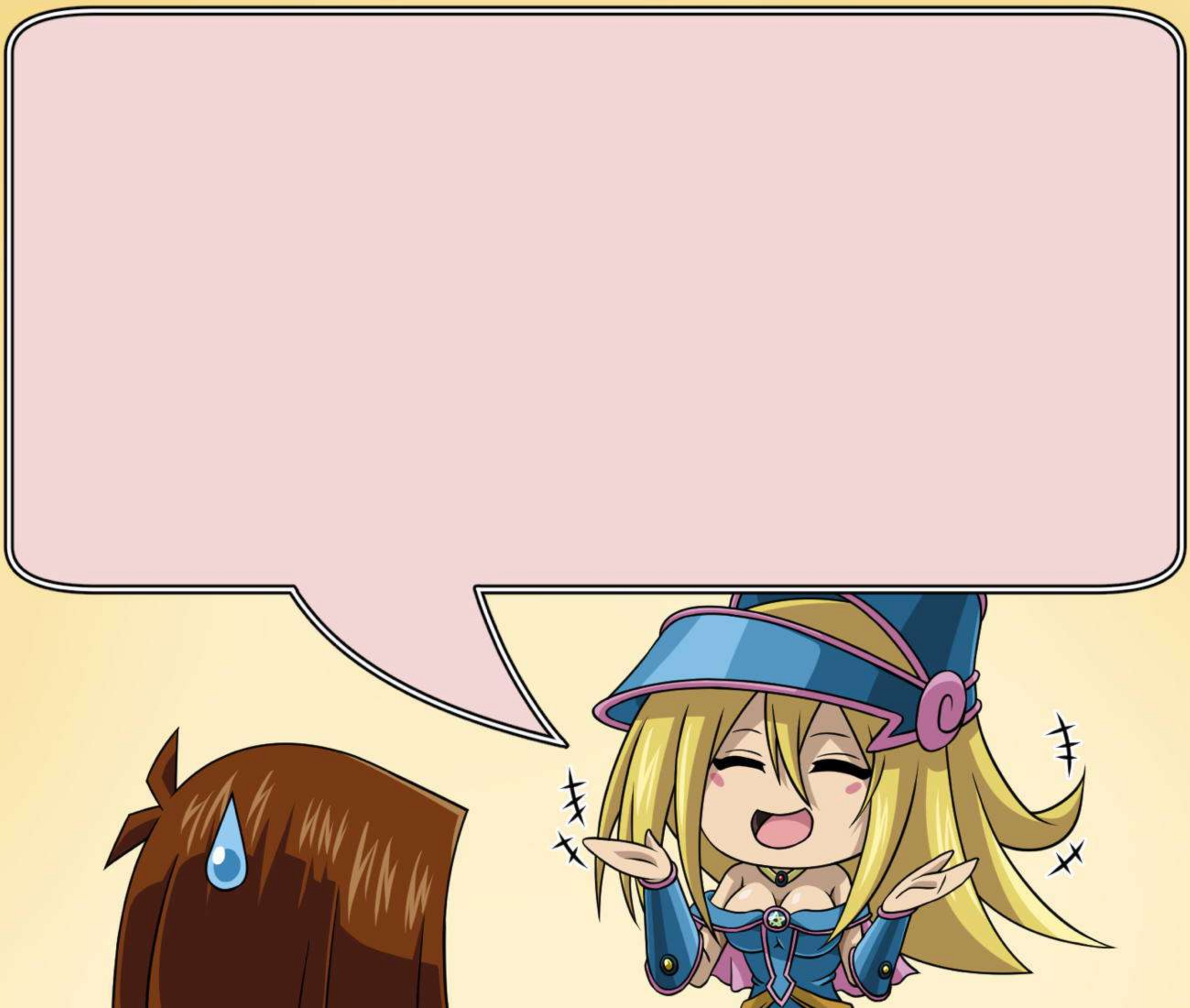
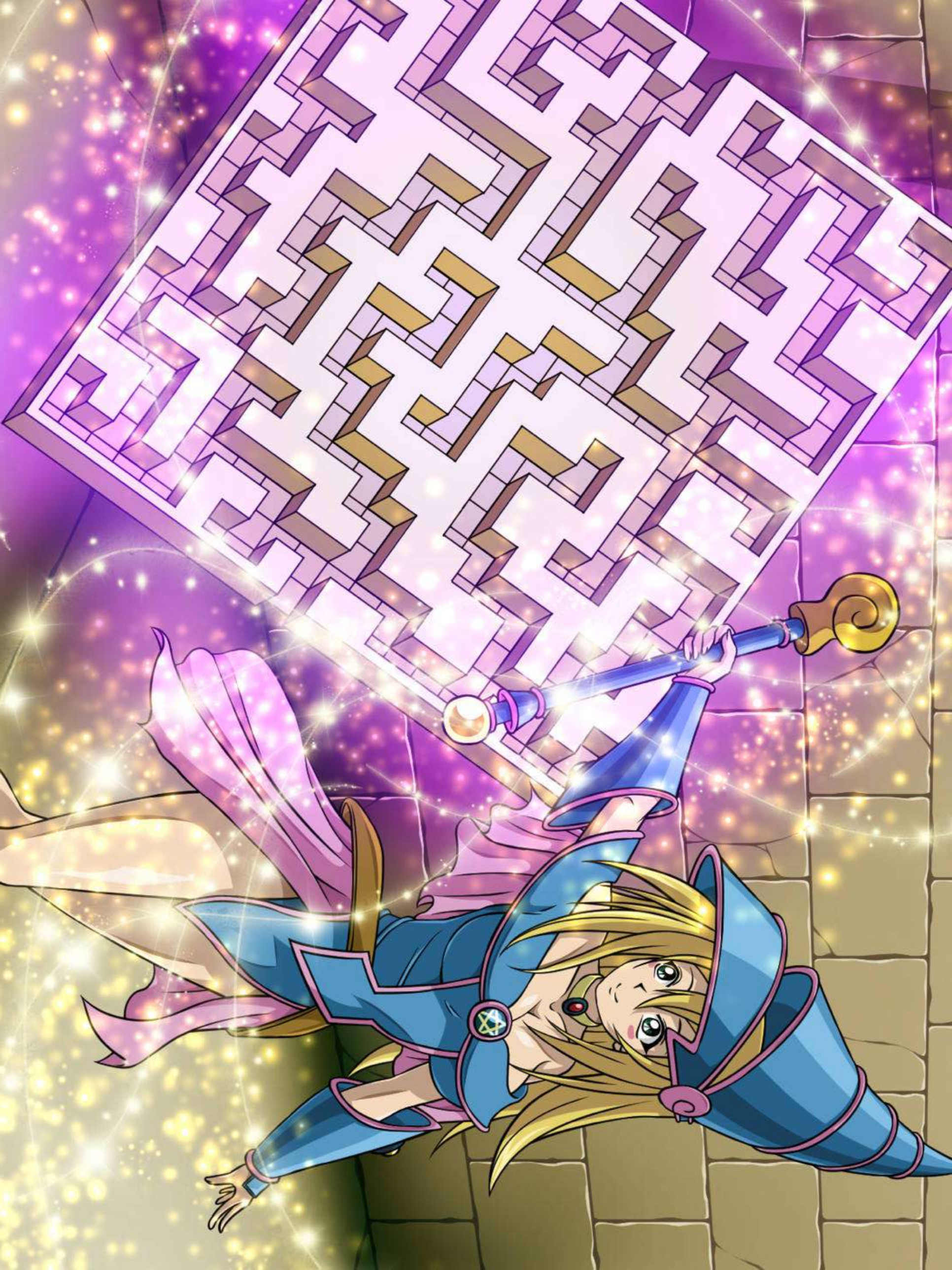
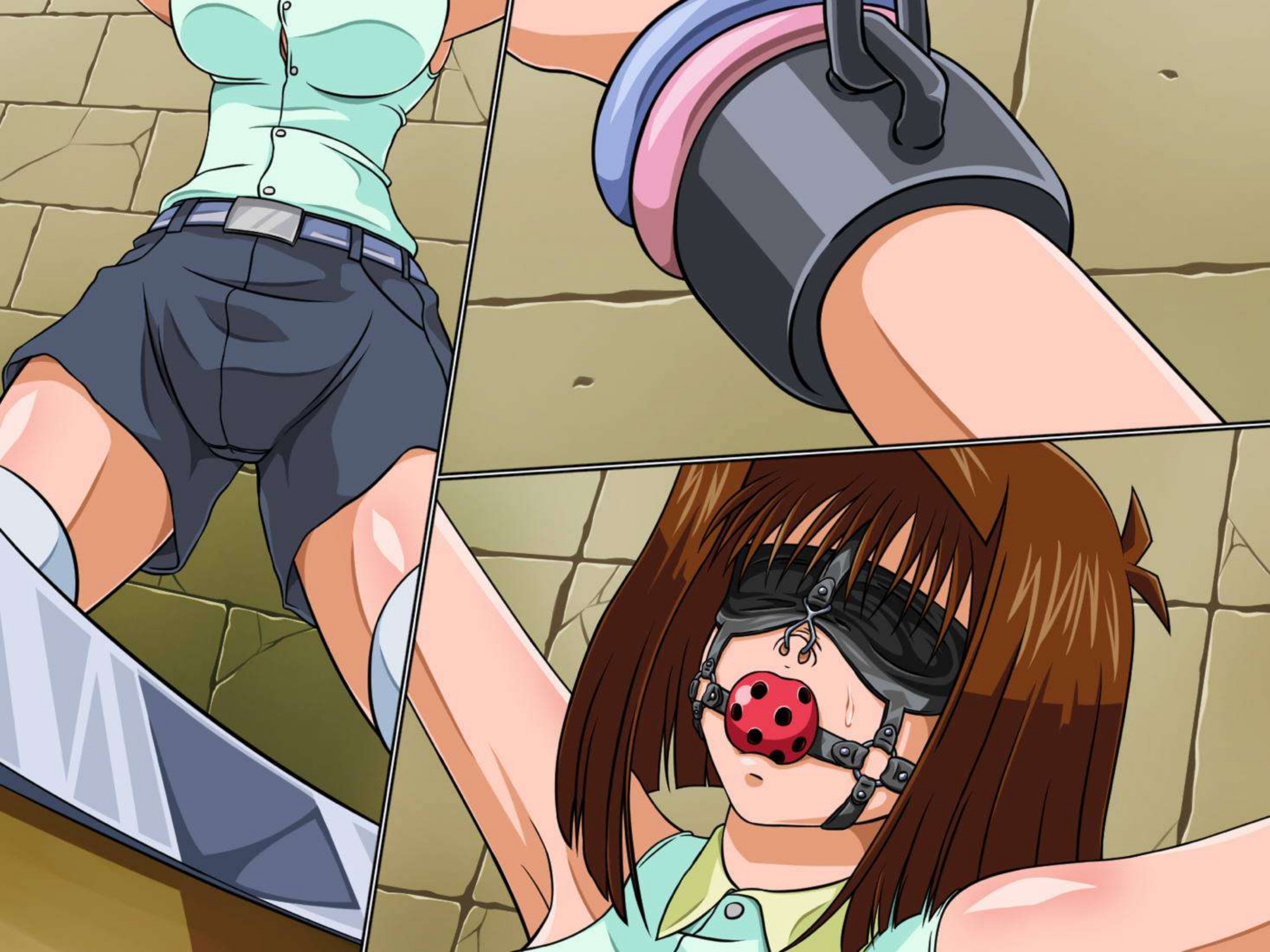
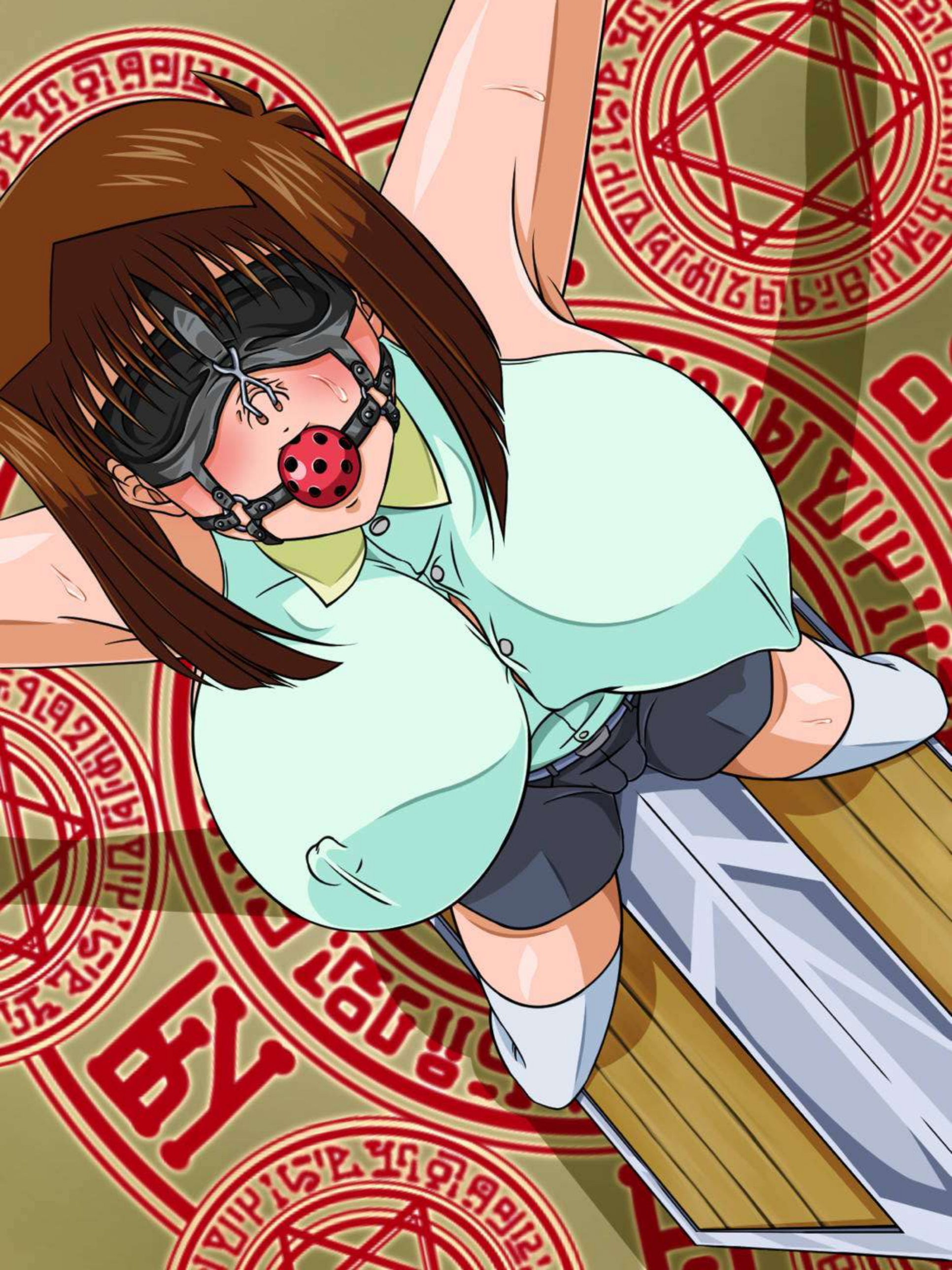
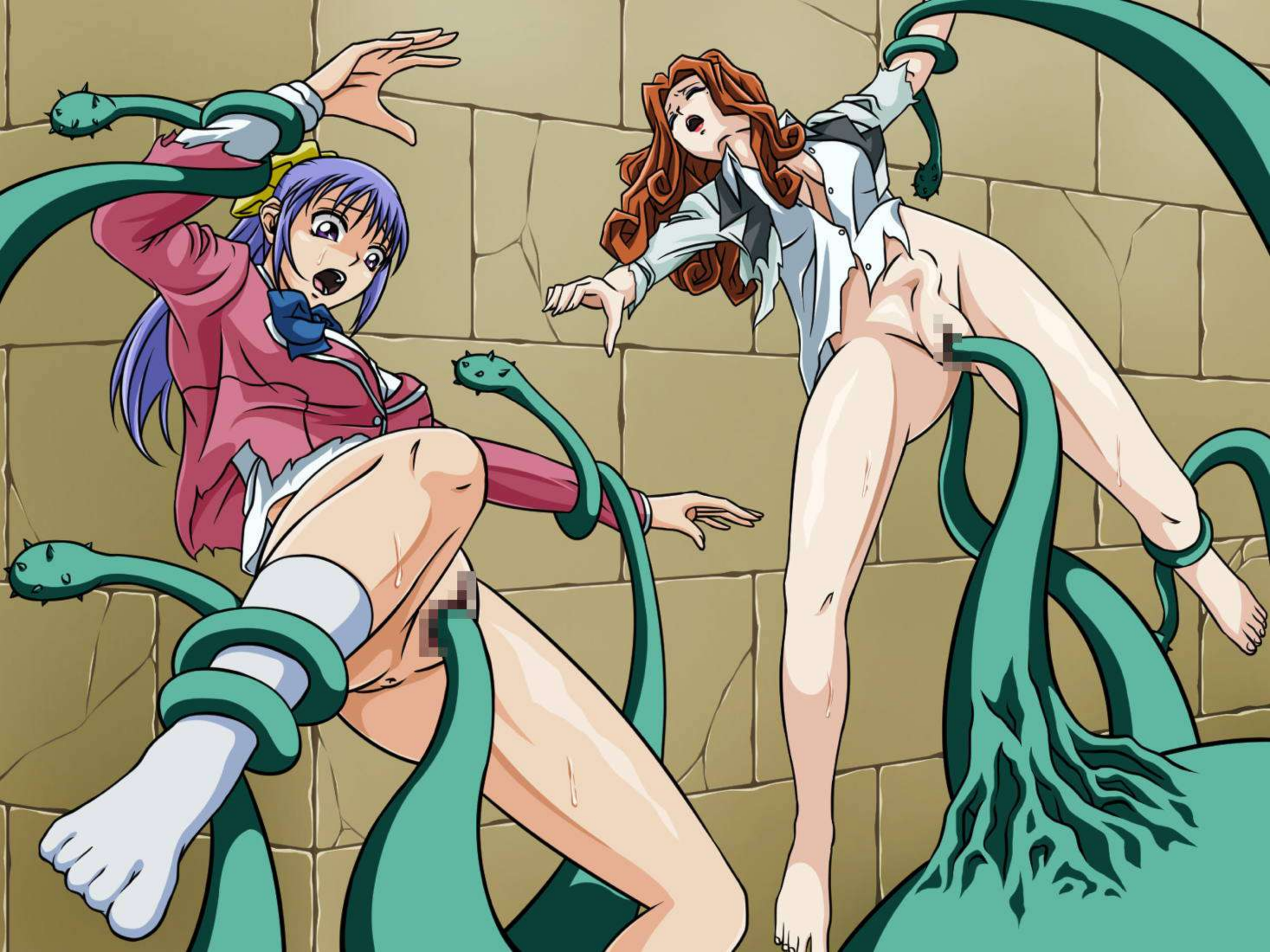
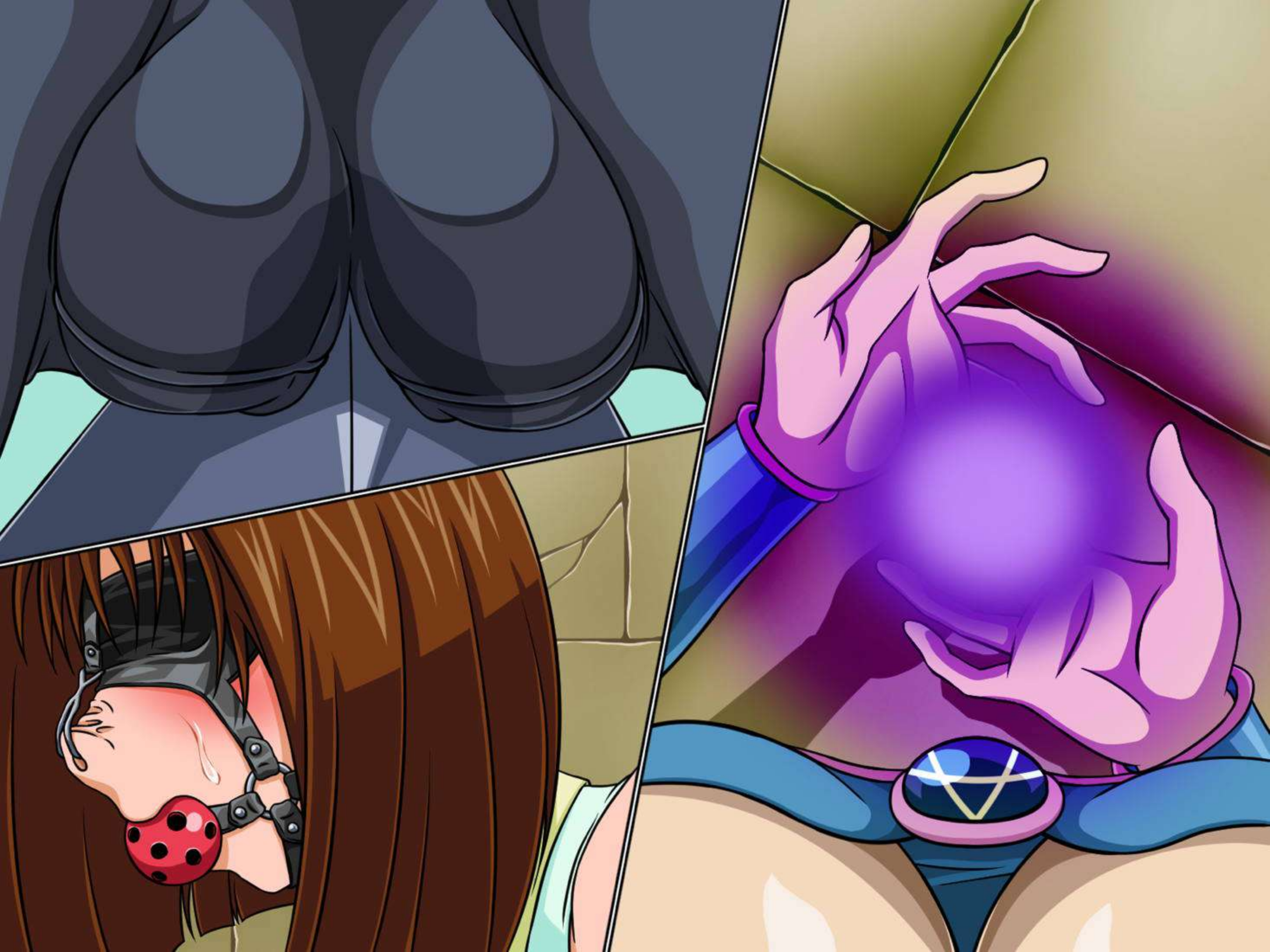
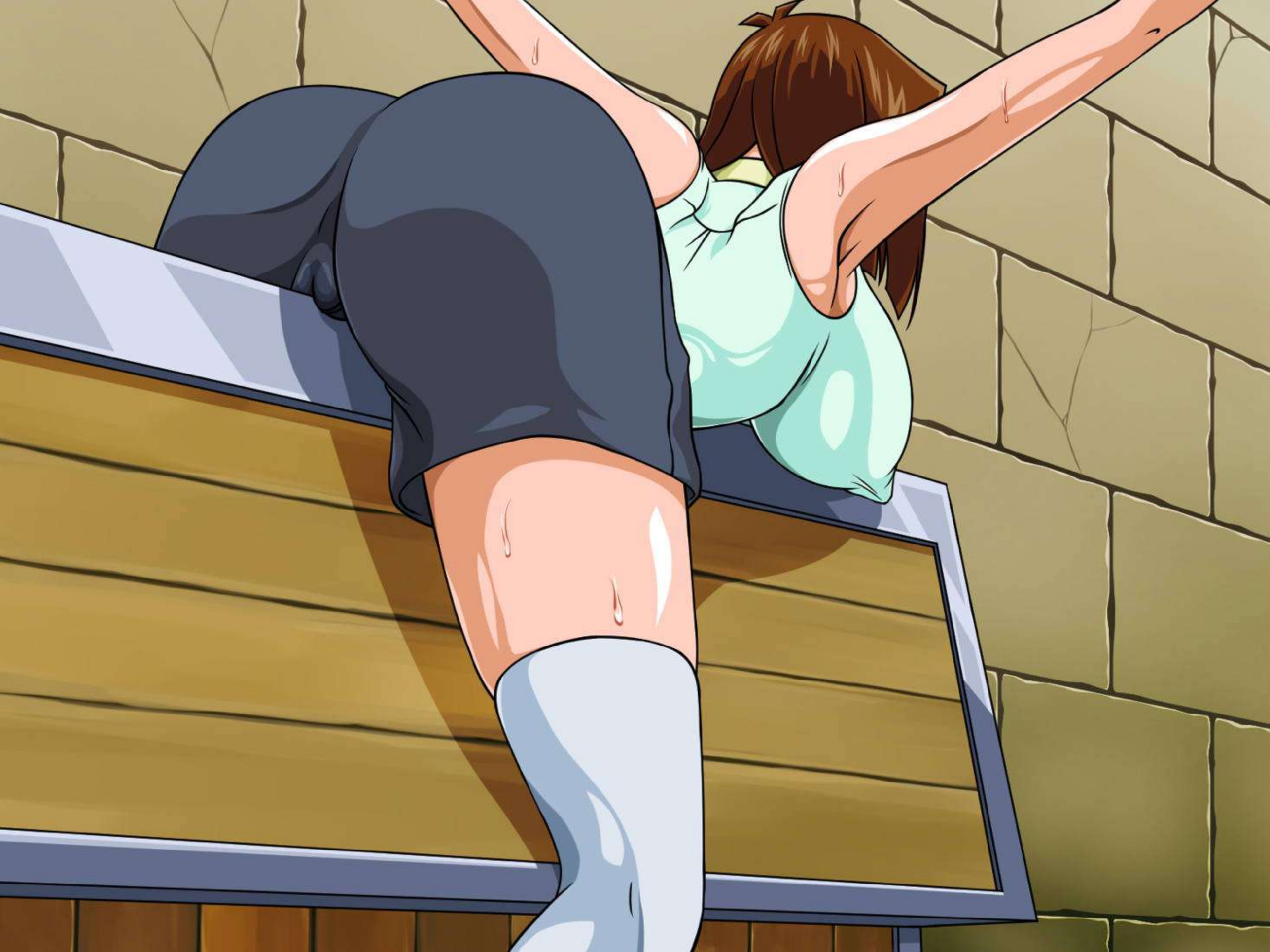
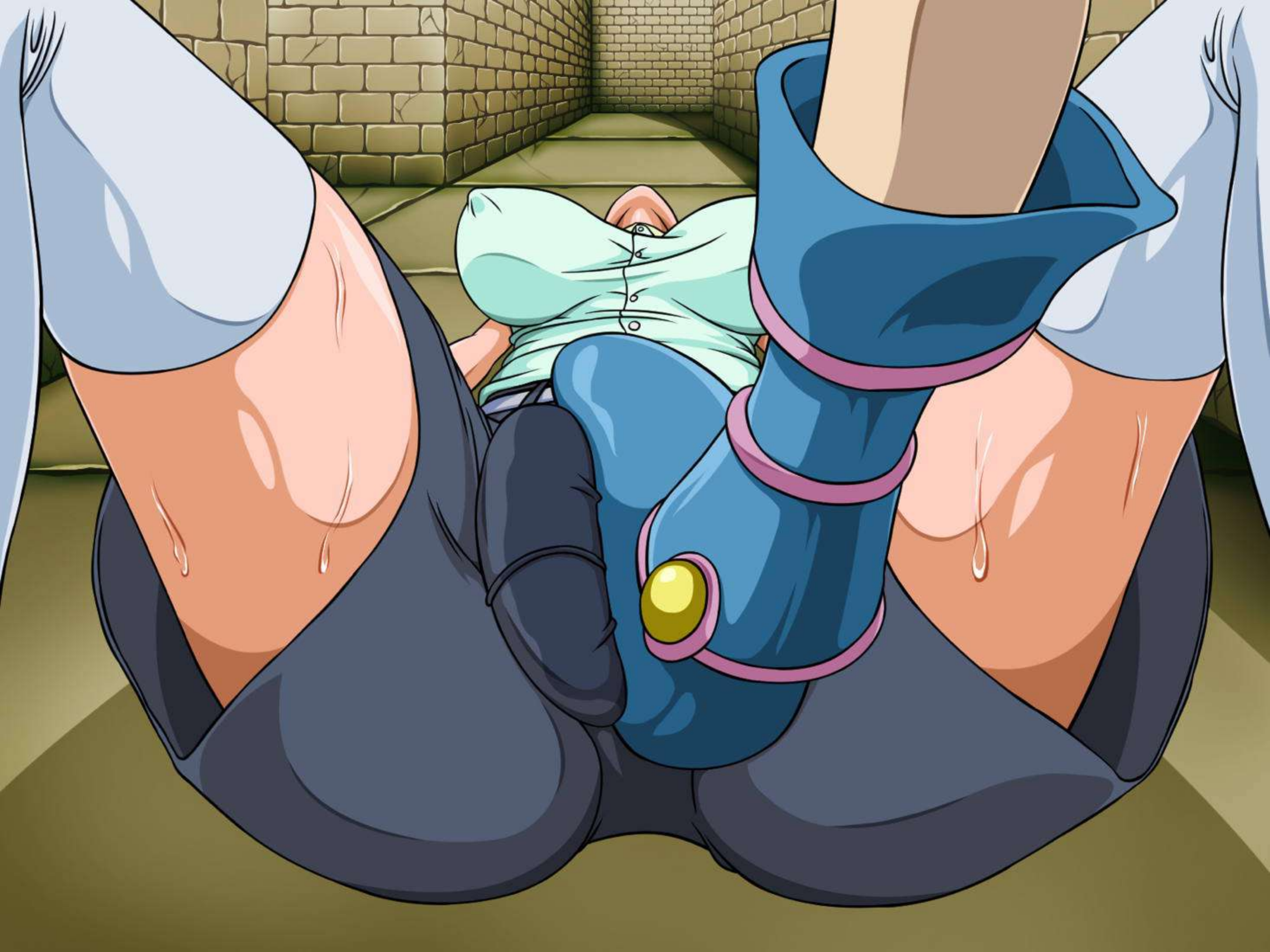
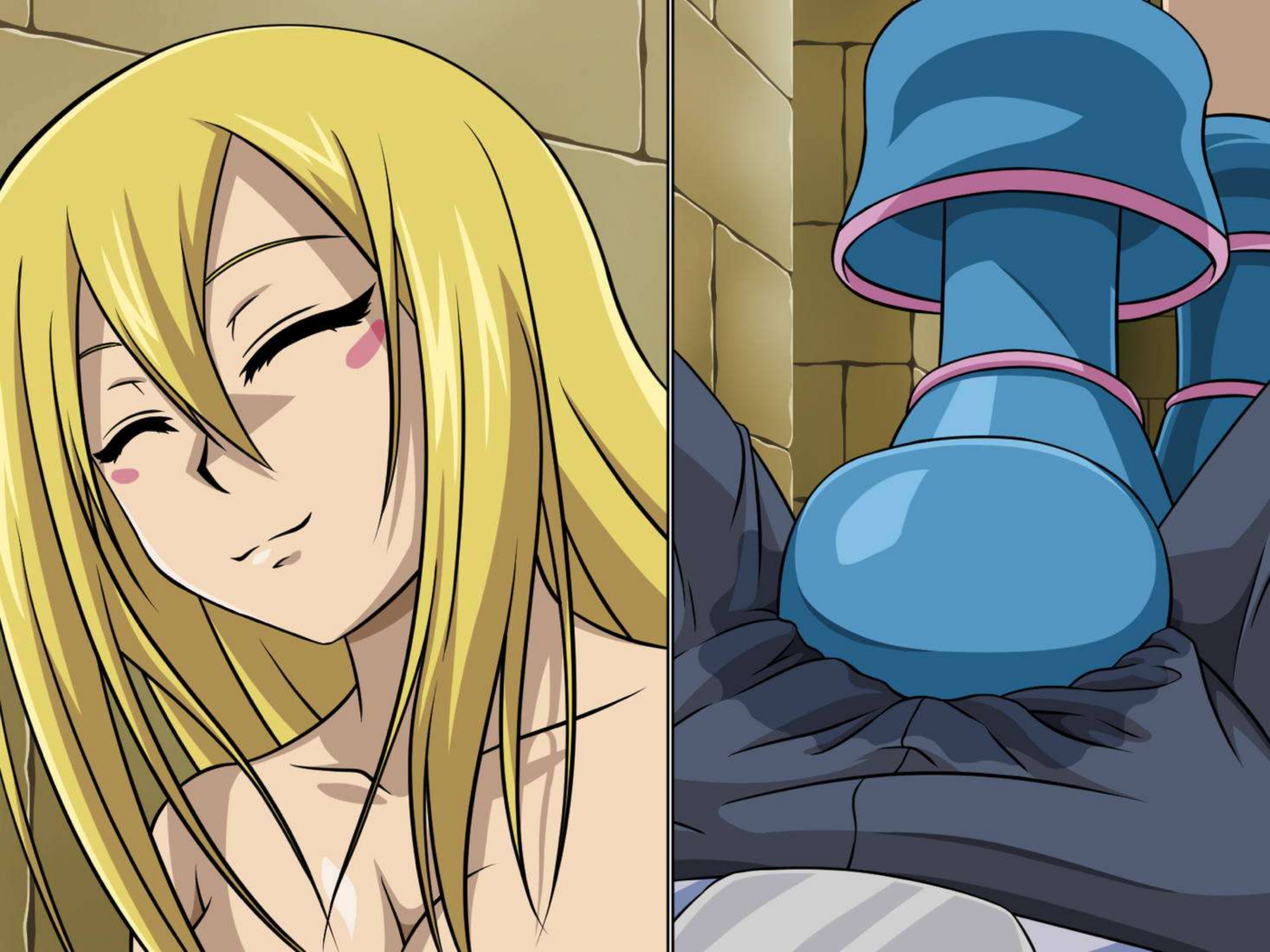
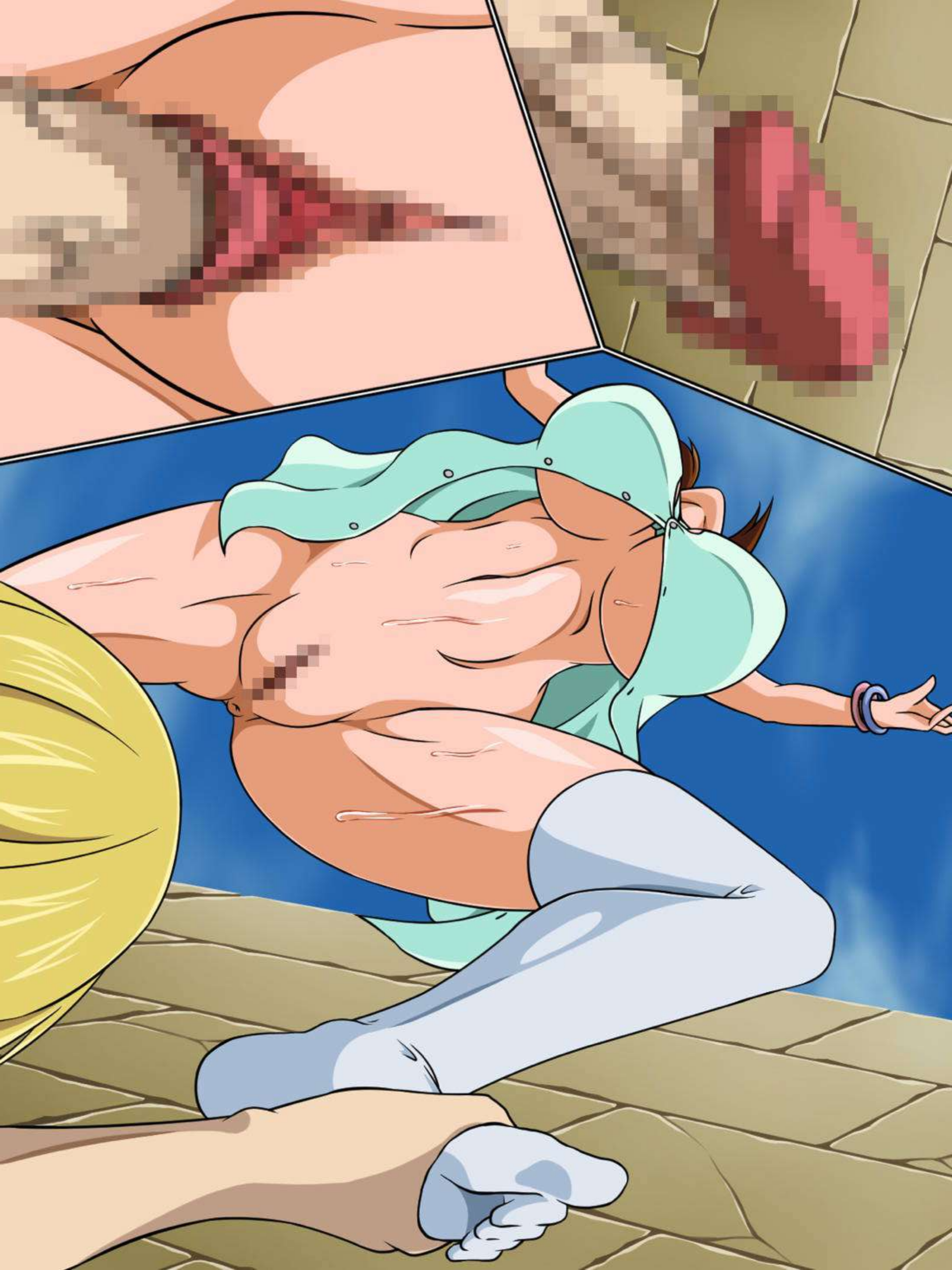
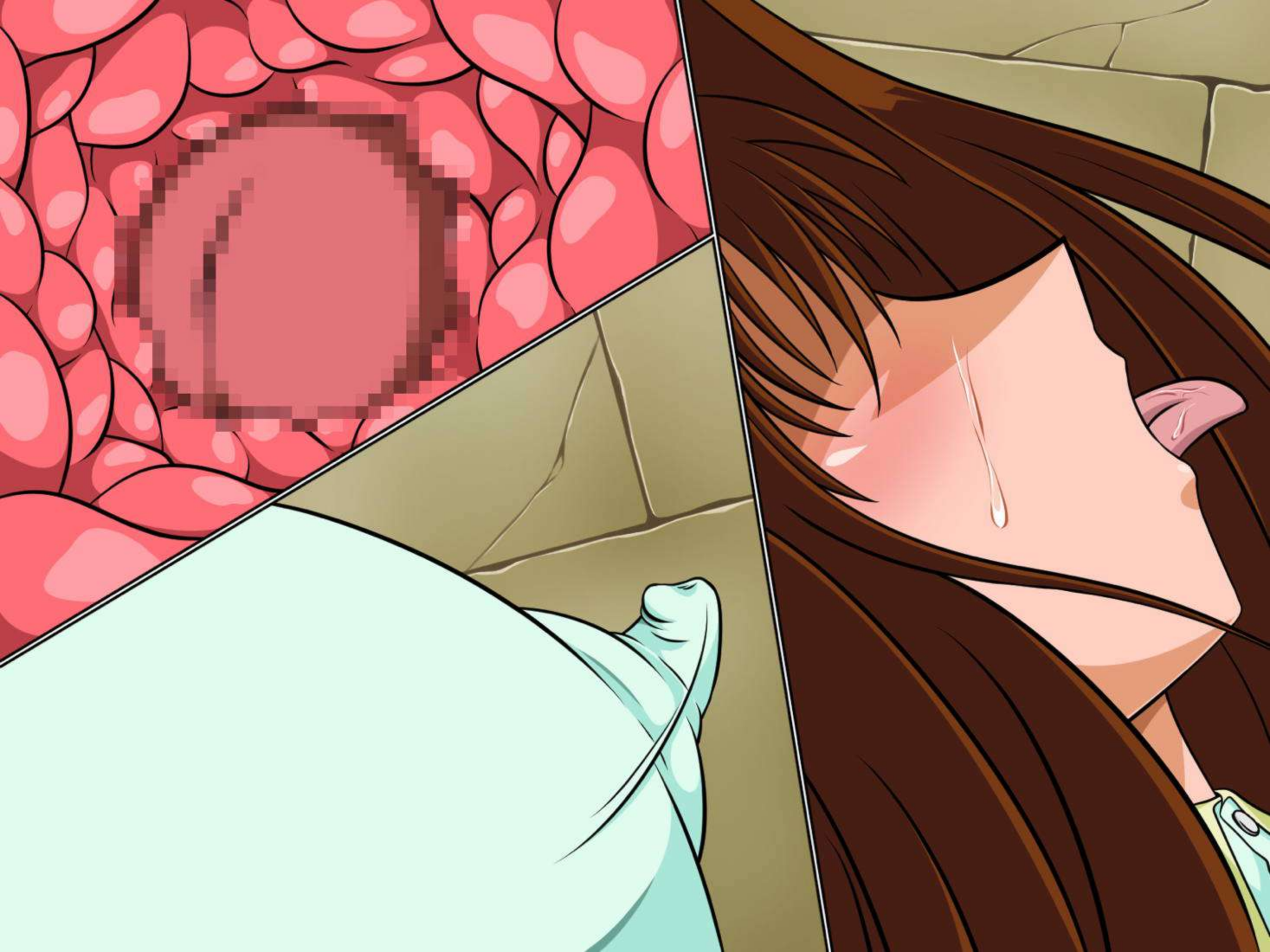
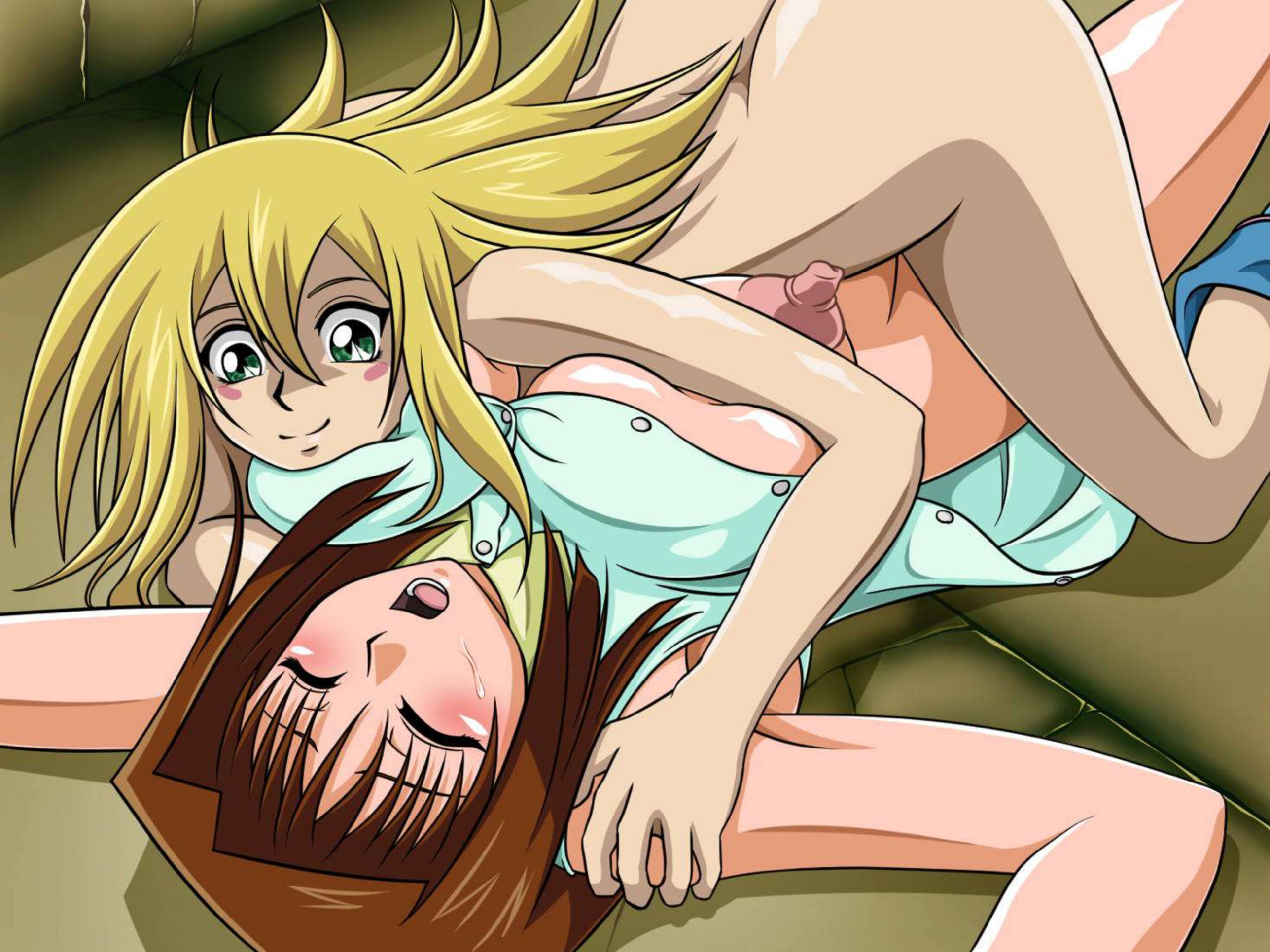
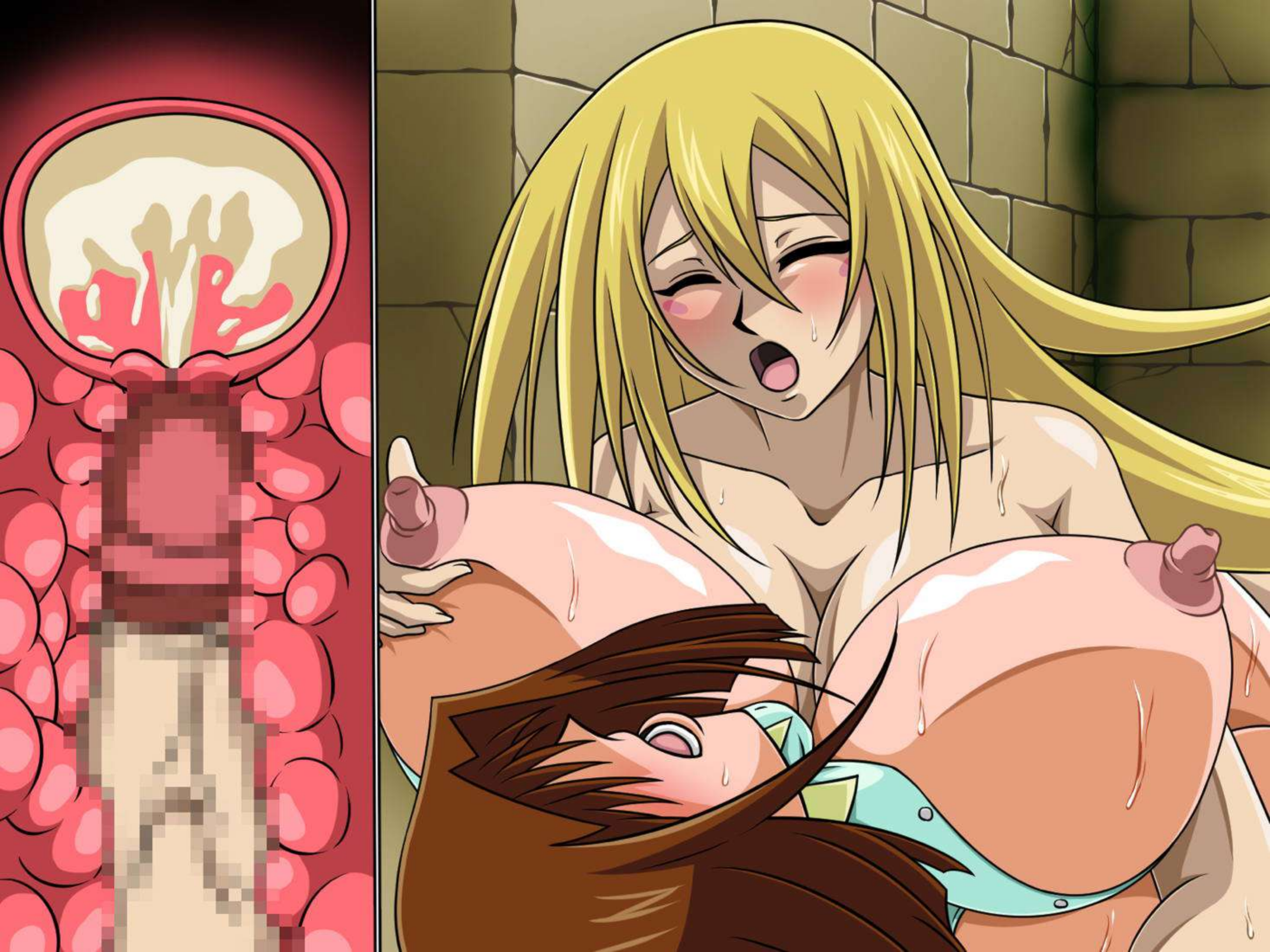
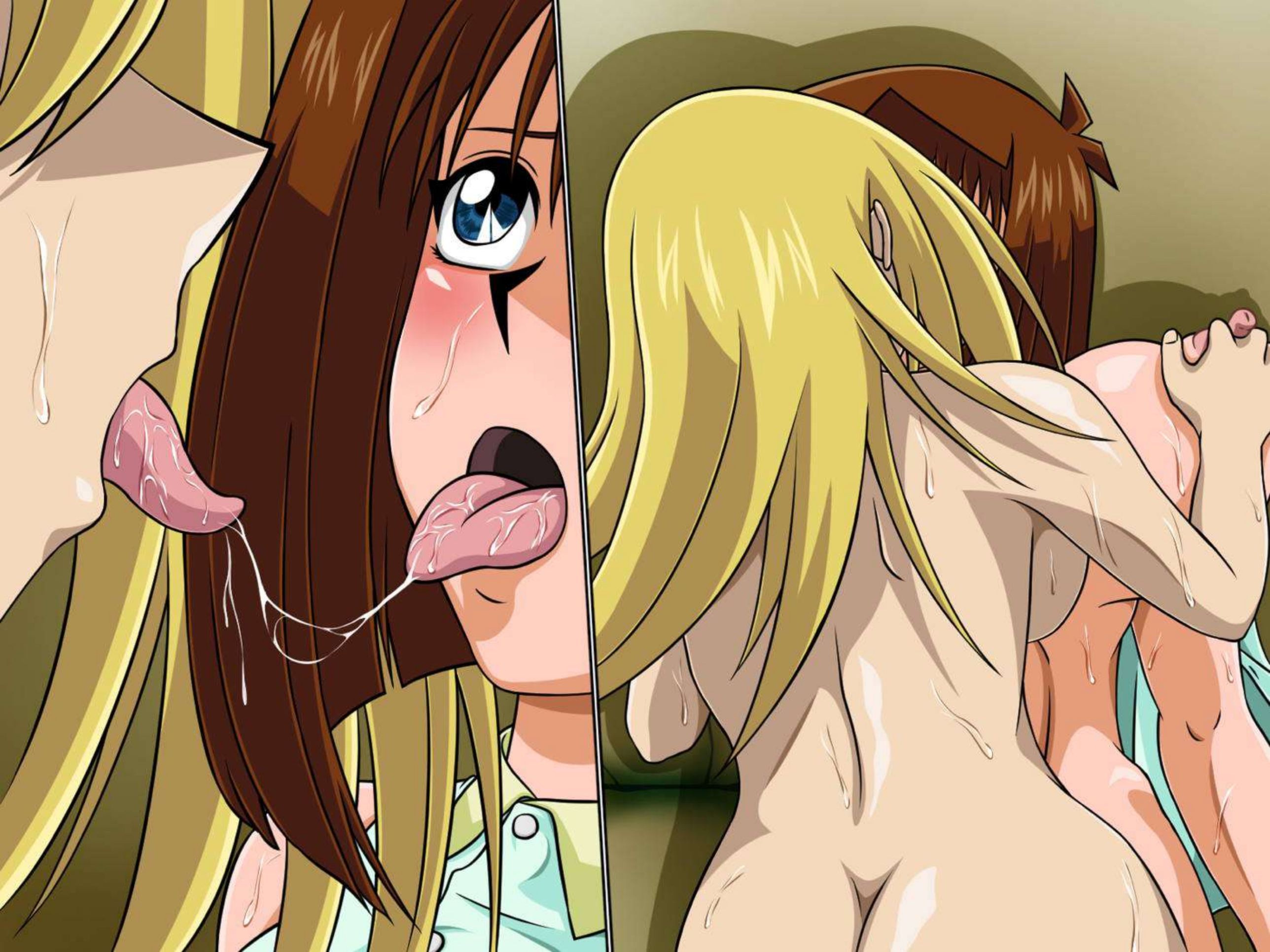
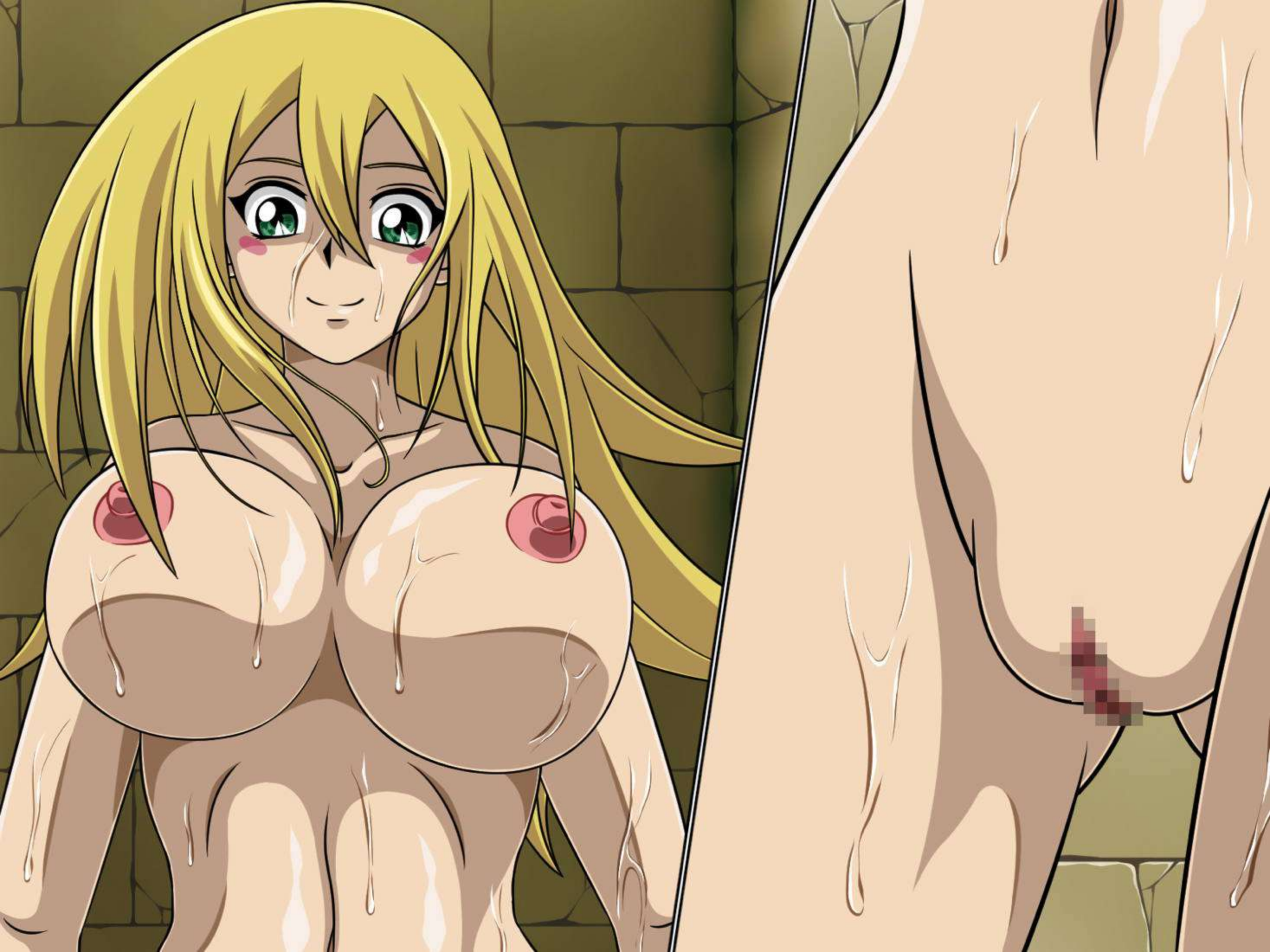
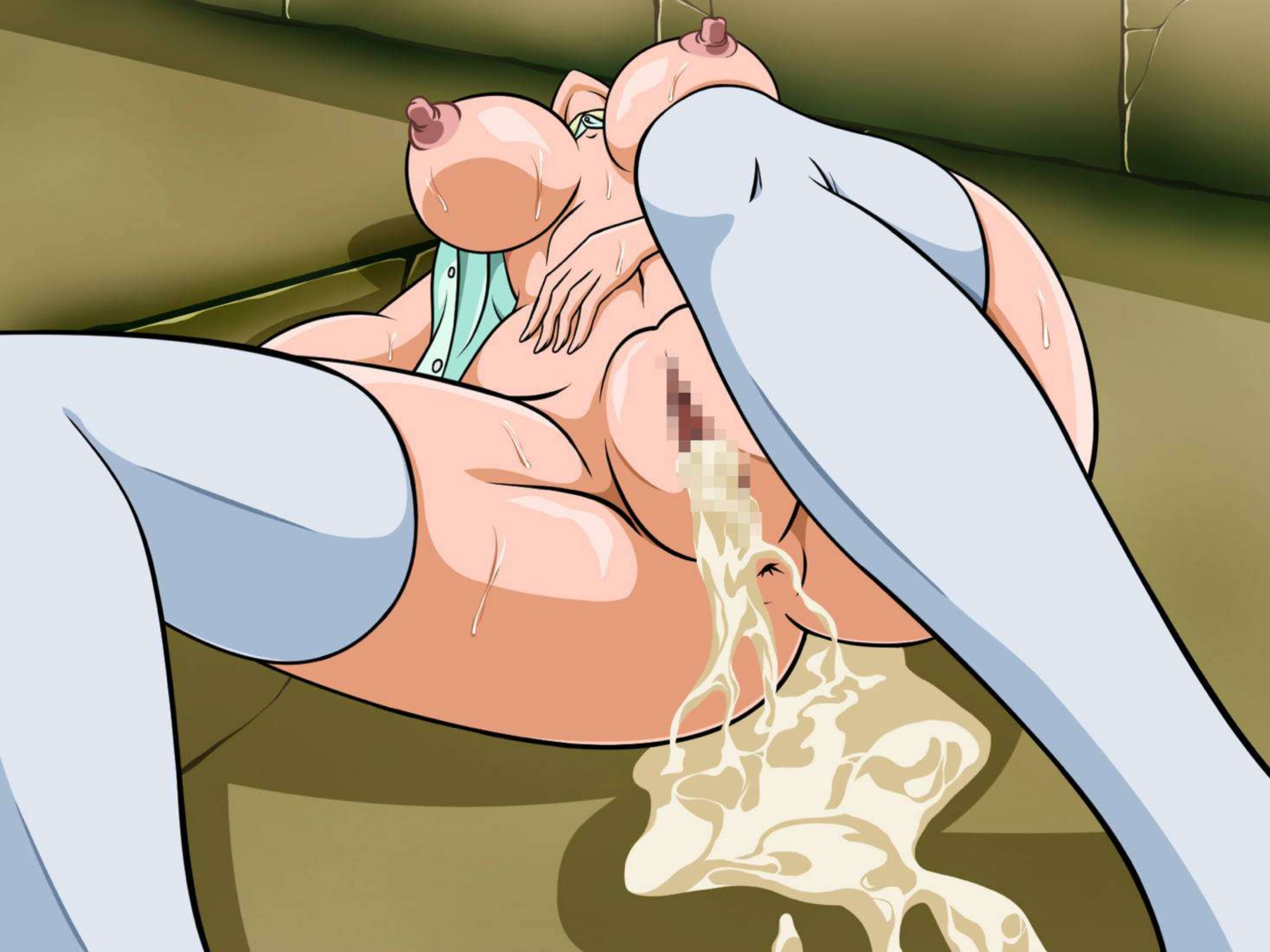
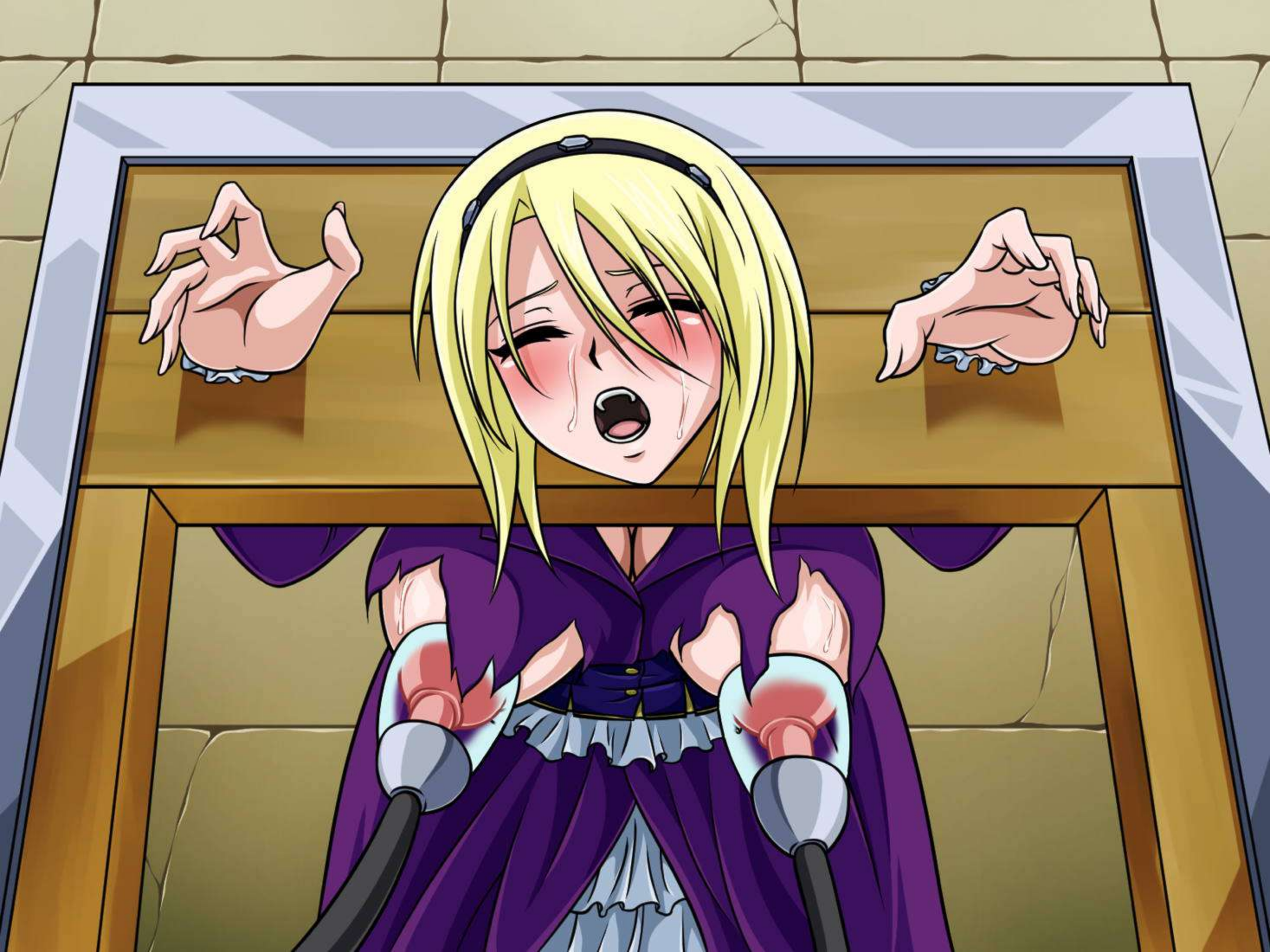
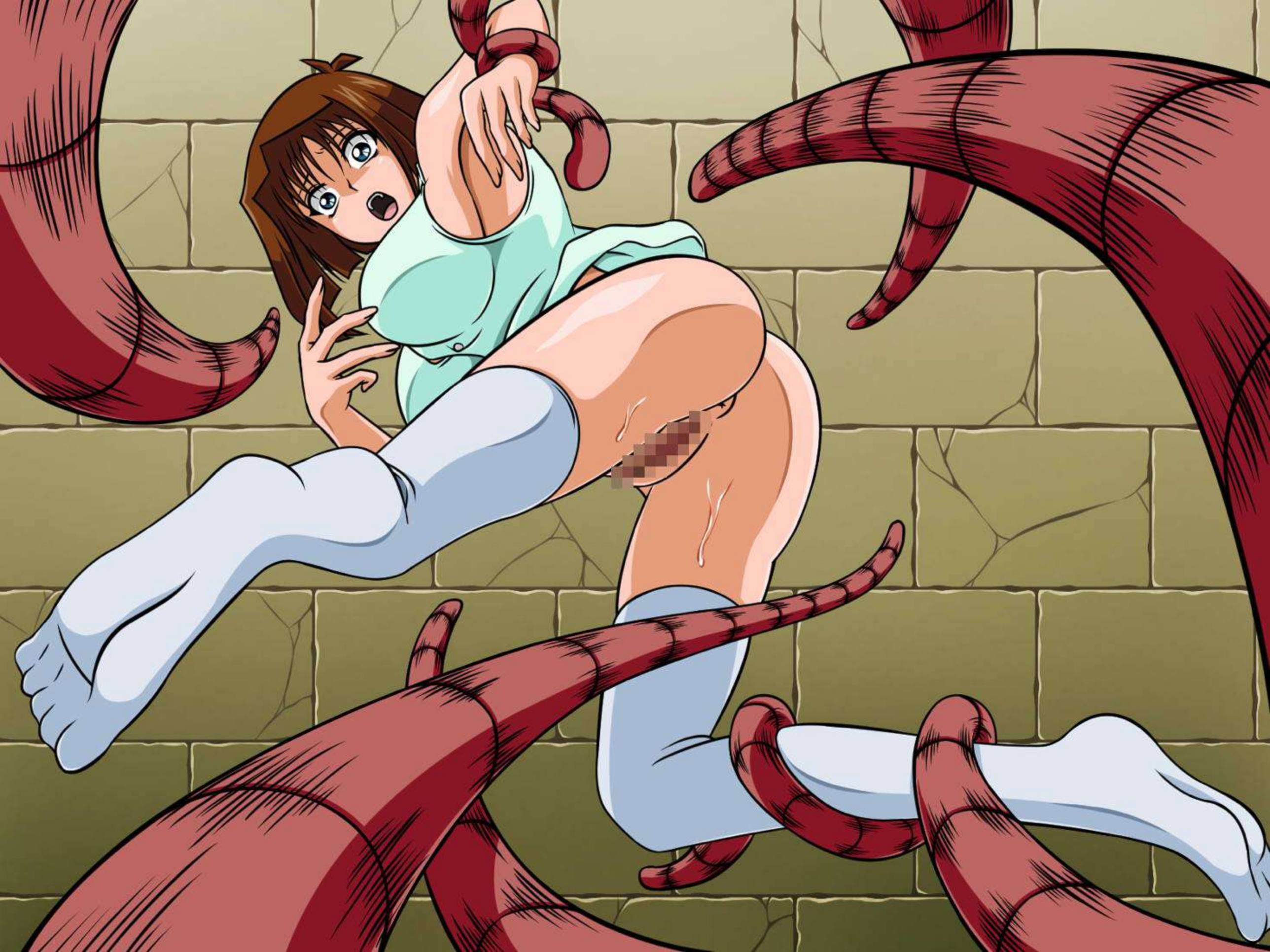
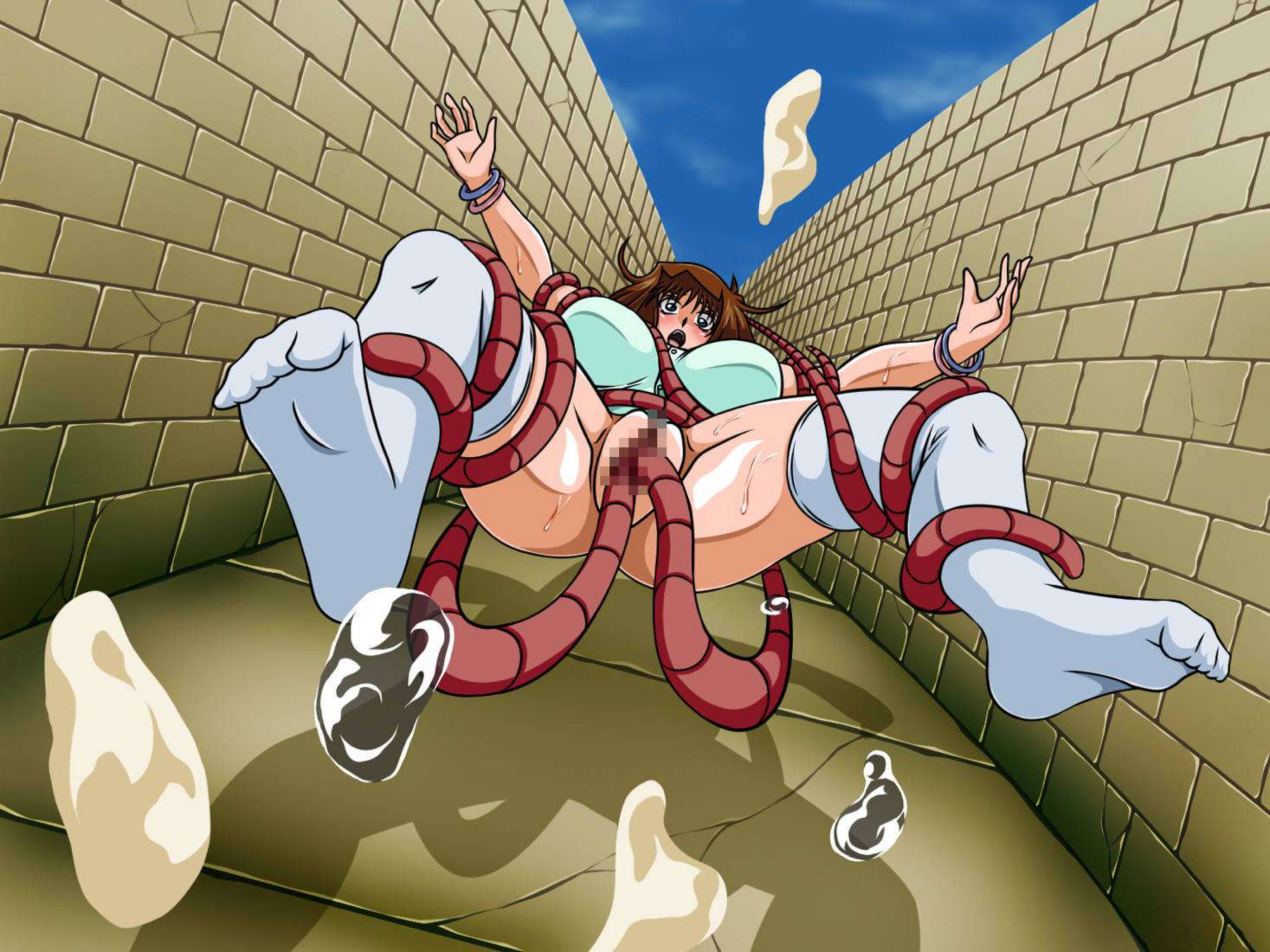
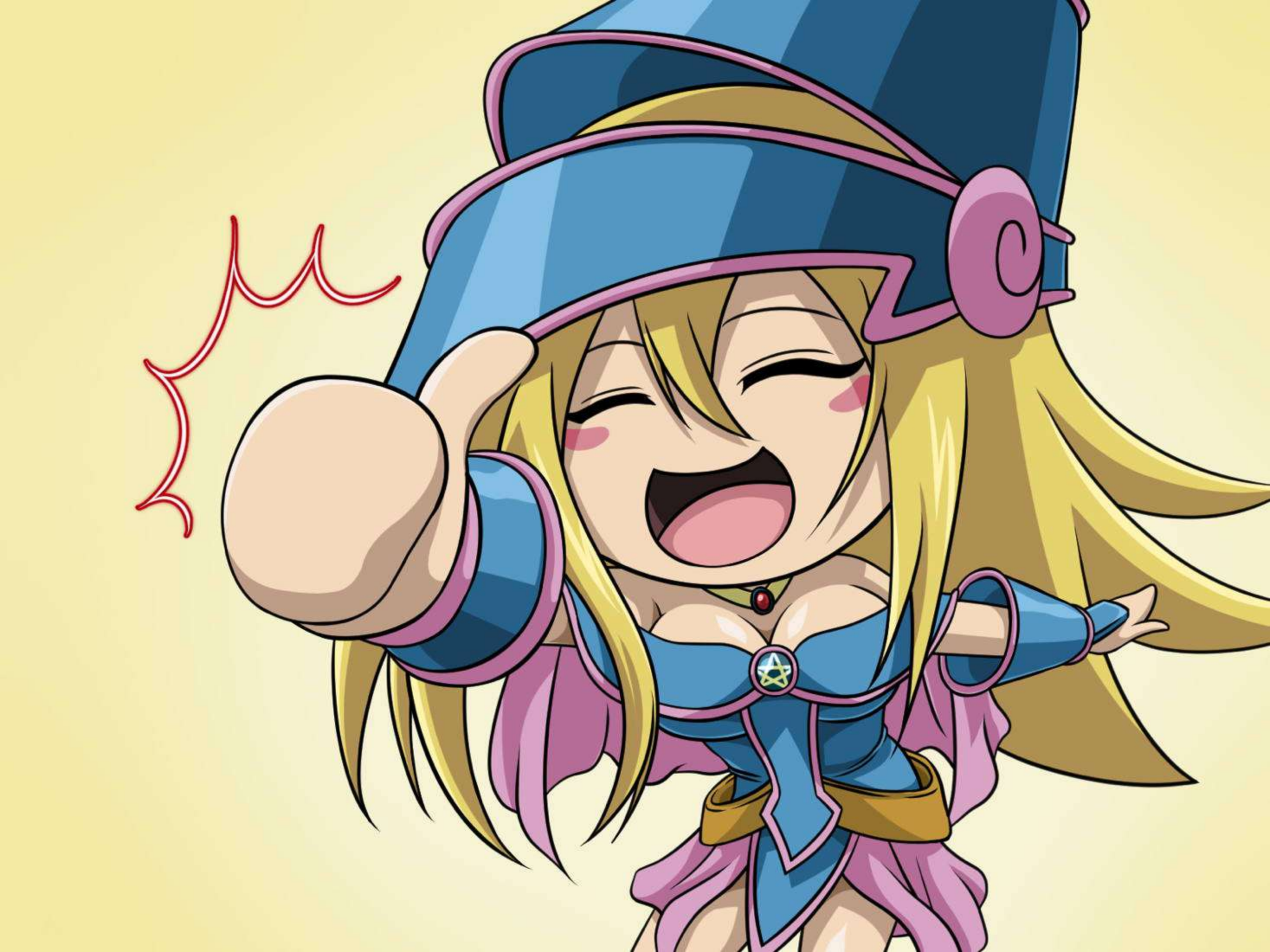
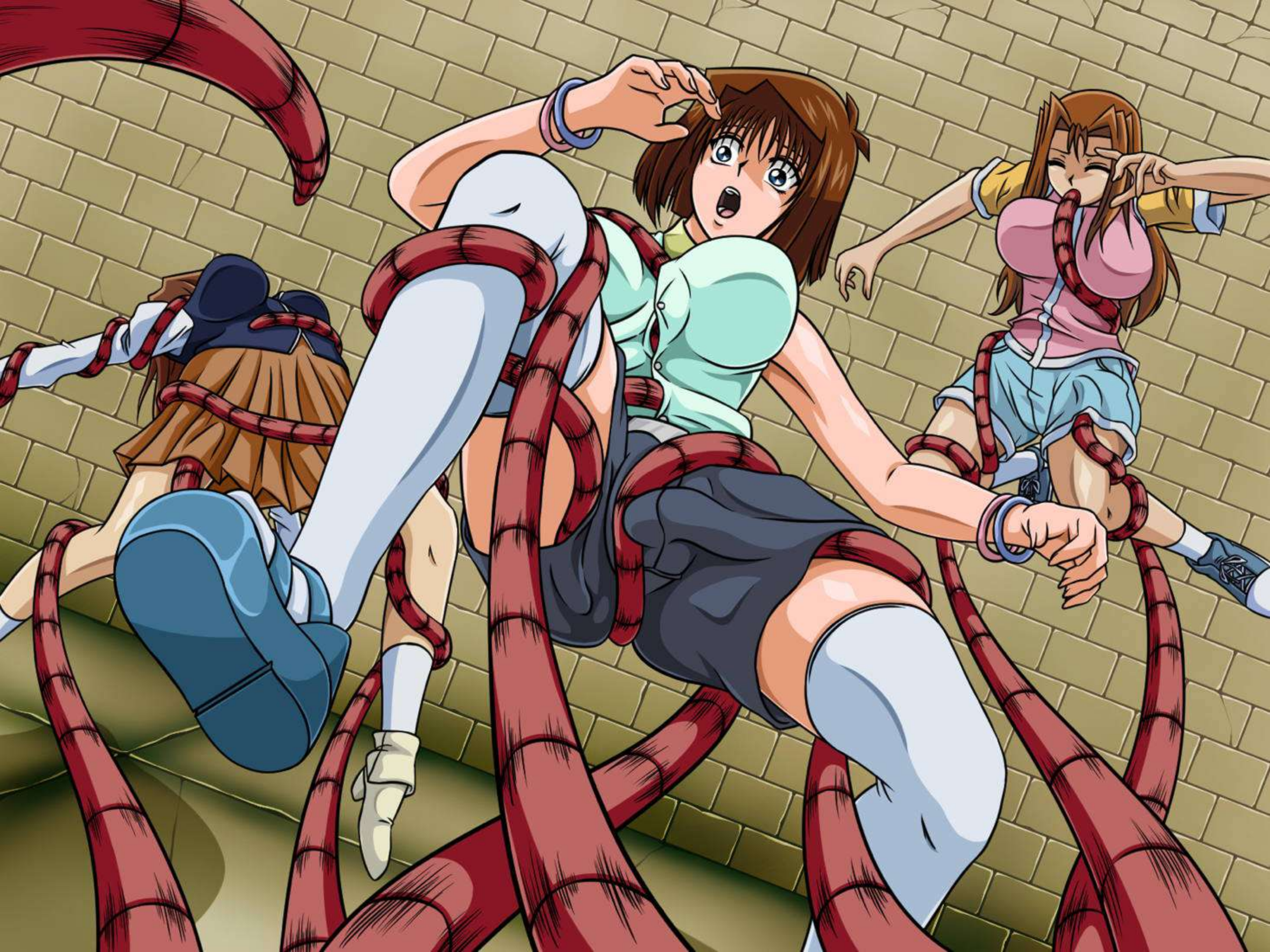
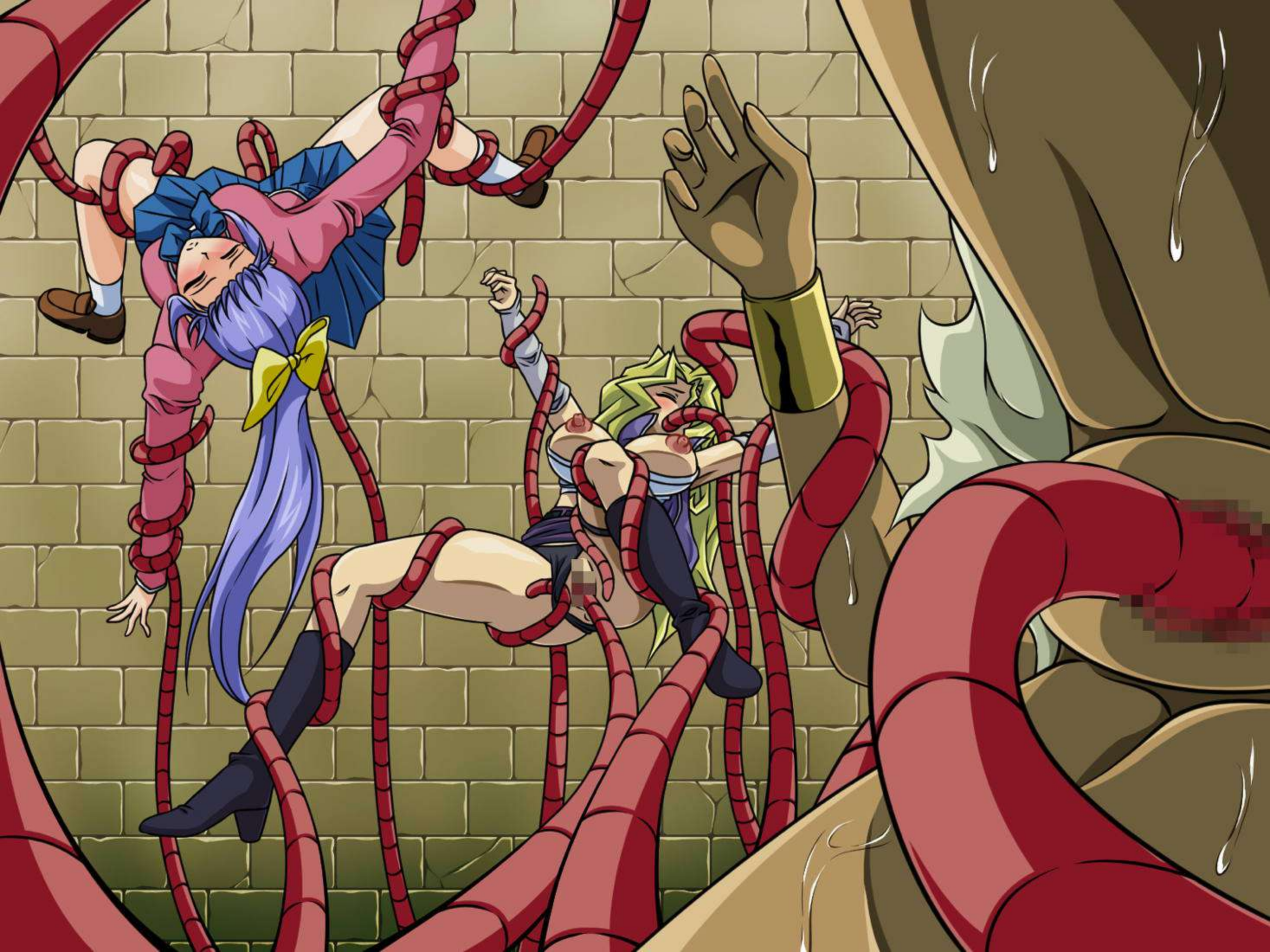
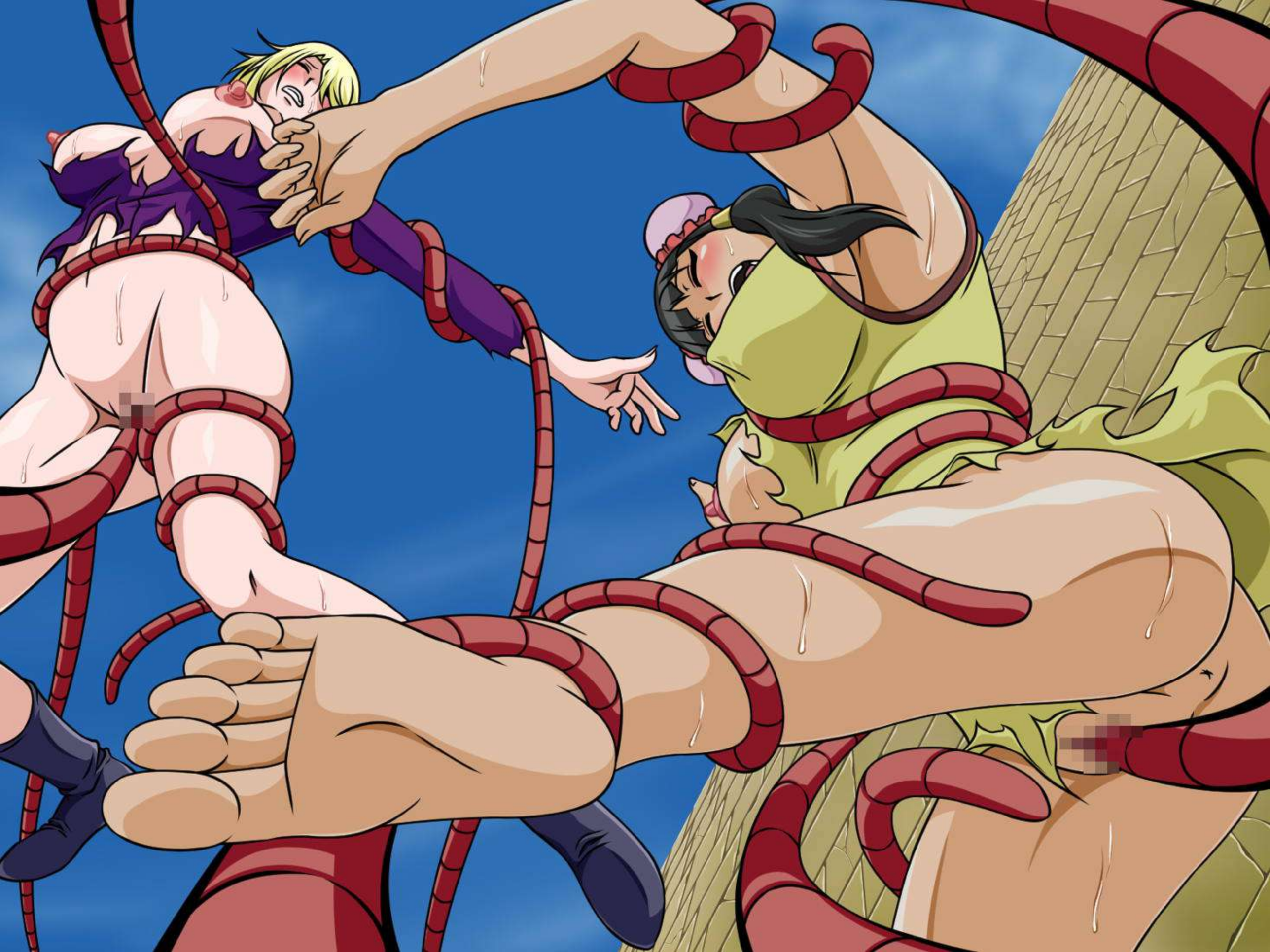
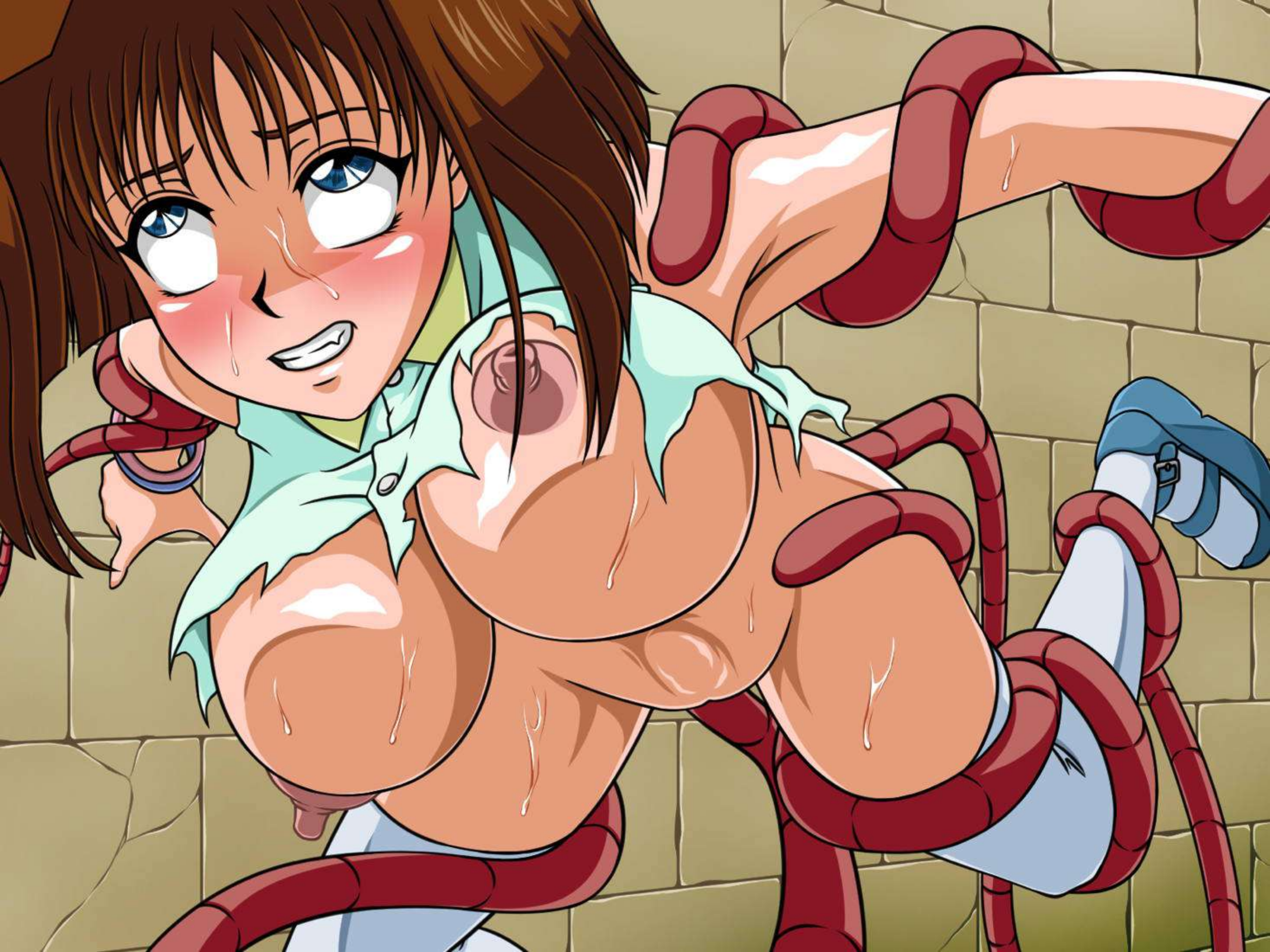
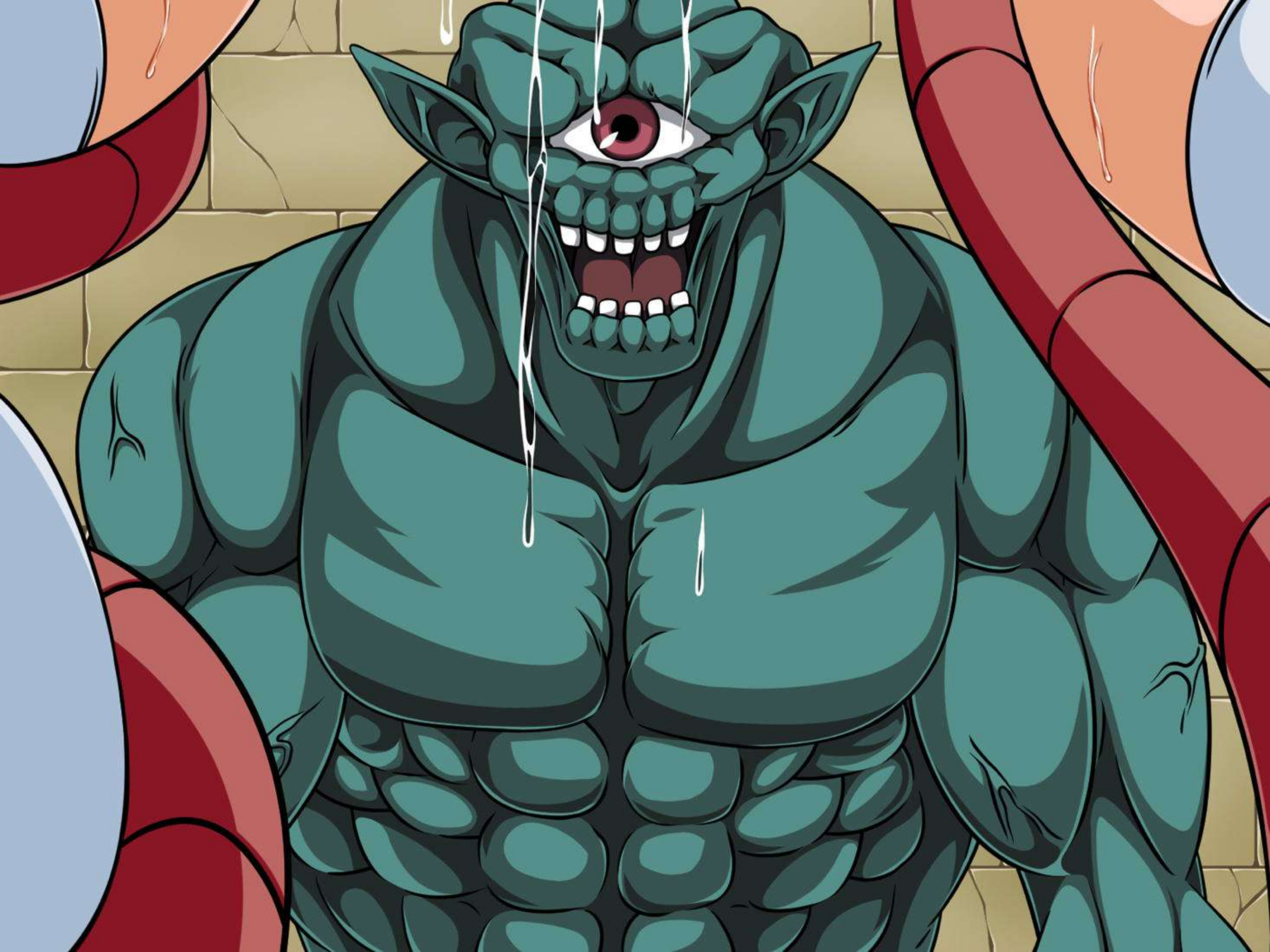
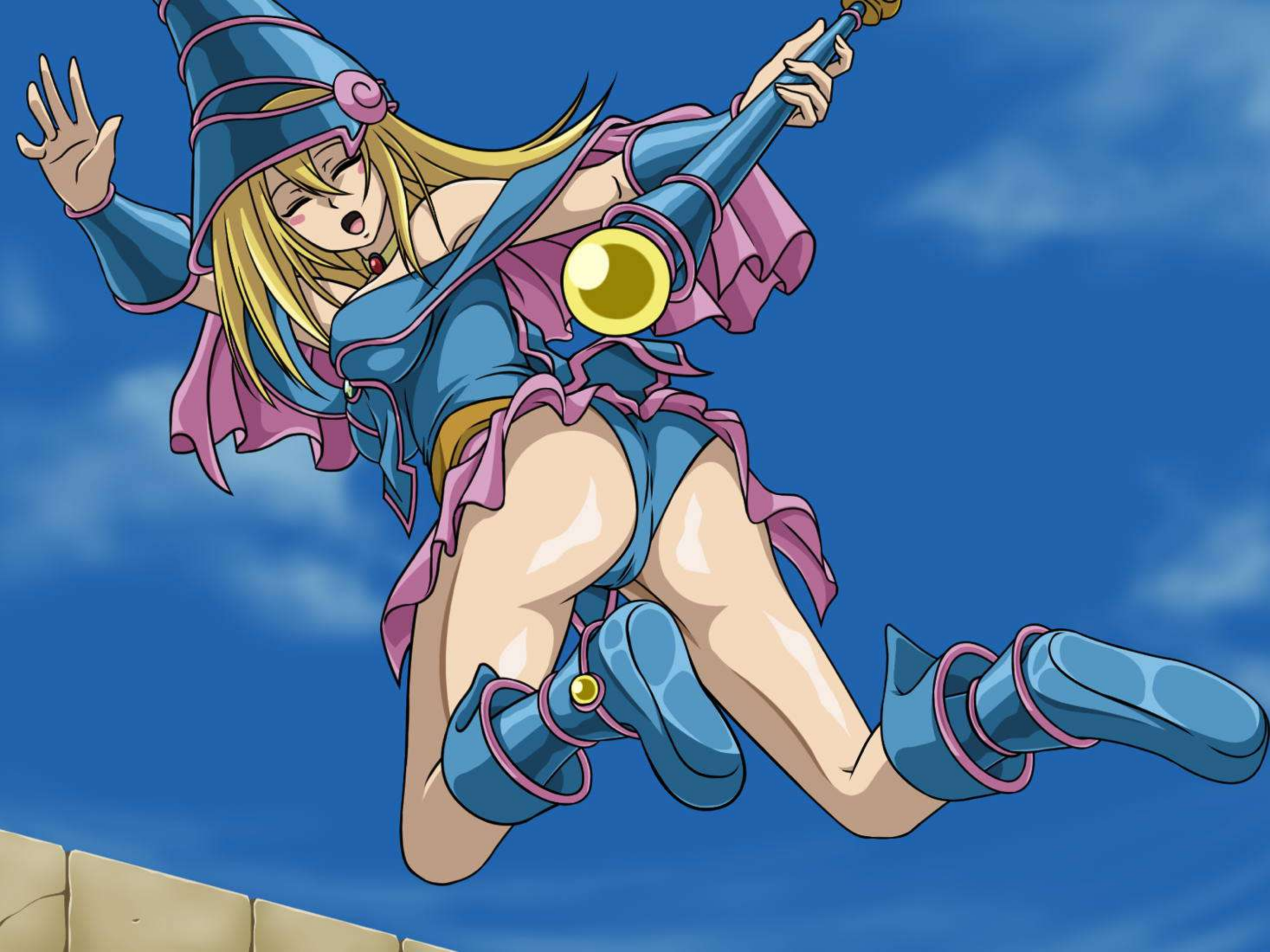
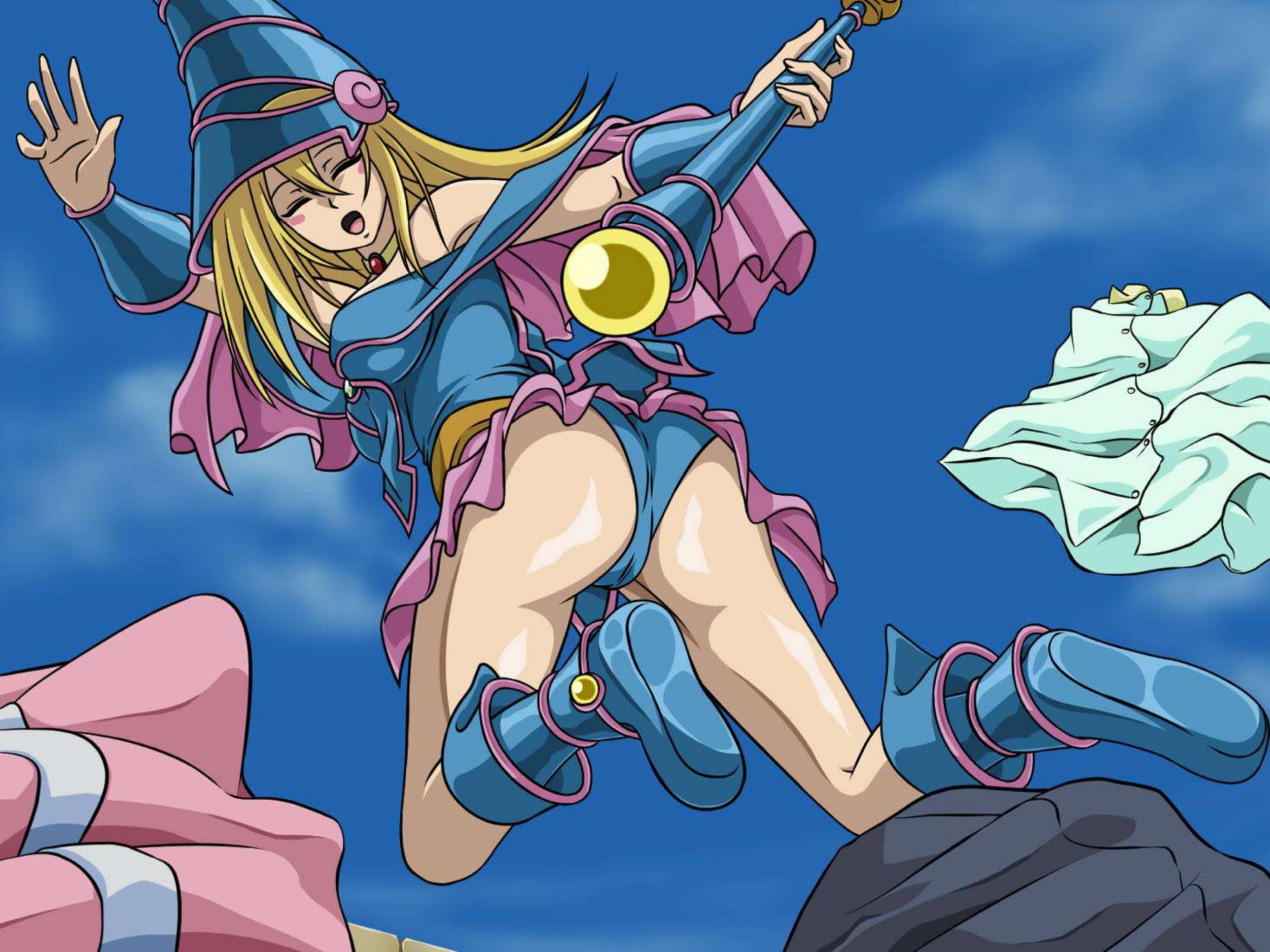
モンスターは既に触手に犯されていた
杏子の腕を掴み、無理矢理引き寄せる。
モンスターの太い陰茎が杏子のアナルに
強引に差し込まれる。
メプ…
ングゥ
ギチ…
うむッ
ヒグゥ
ジュル…
ジュボッ
ズボッ…

力任せに無理矢理犯されている杏子は、
触手と陰茎に激しく突かれる度、大きく
仰け反る。
杏子の絶頂に合わせるかのように
モンスターの陰茎から大量の精液が
濁流の如くに腸内を駆け巡った。



「元の世界に帰れるゲートは、スタート地点に作っておくから、このまま犯され続けるも良し！メイズ探索も良し！…気が済むまで楽しんでいってね!!」

BMGはそう言い残すと、宙に浮かび上がる。


「…アッ！そうそう！……はいコレ」
ＢＭＧは杖を振るうと、参加者達の衣服が
現れる。
「さすがに裸のまま帰ると大変な事に
なるもんね！…それじゃあッ!!」
宙を舞う衣服と犯され続ける参加者達を
残し、ＢＭＧは去っていった。

参加者達は何度も絶頂し、気絶を繰り返しながら、気が済むまで犯され続けた。